

41727

教科書文庫

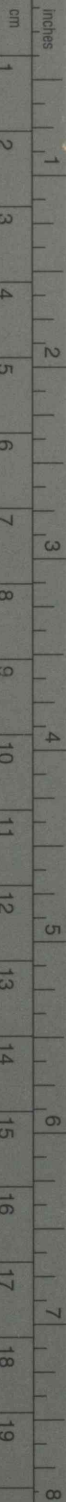
4
810
41-1940
20000 42078

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

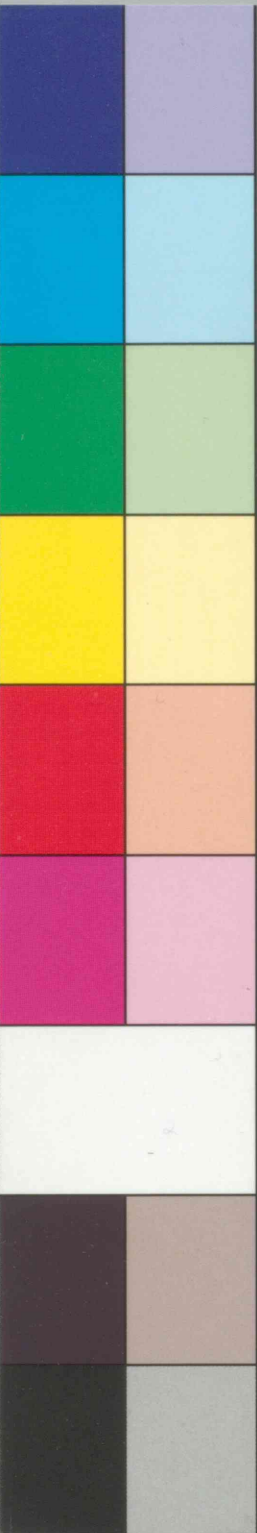
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



3759  
Fu26  
資料室

新修國文

四年級用 卷一





文部省檢定  
昭和十五年二月二日  
高等女子學校國語科

富山房編輯部編

新修國文

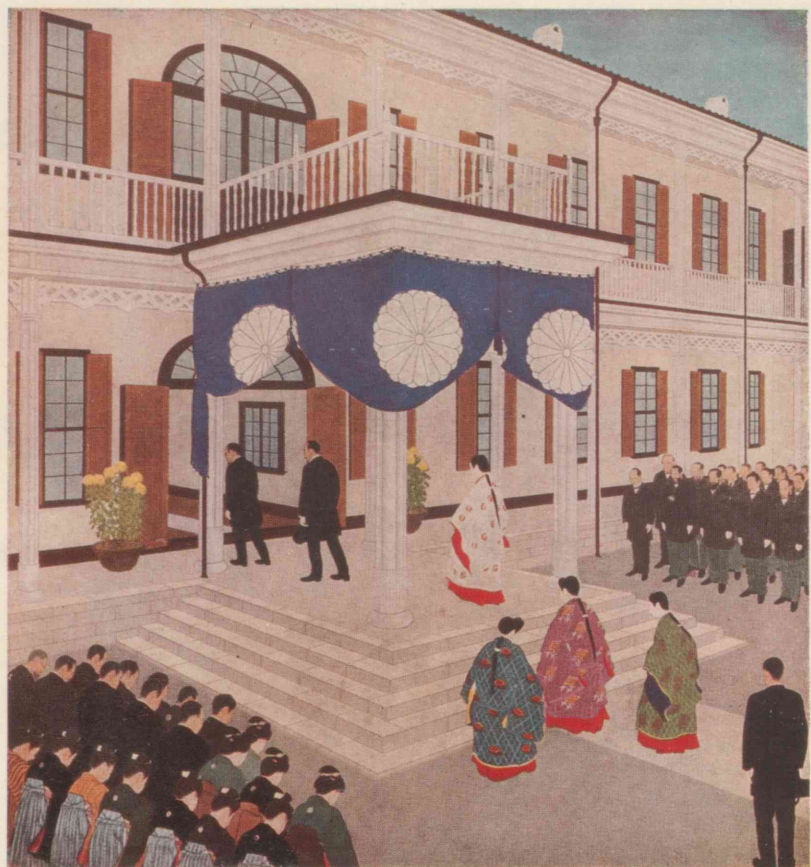
四年制  
女學校用

東京 富山房發行

資料室

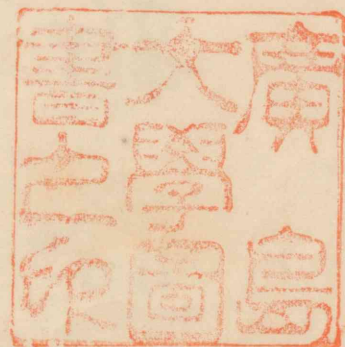
375.9  
Fu26





筆月弦澤矢

啓行範師子女后太皇憲昭





新修國文

四年制  
女學校用

卷一

目次

一 さくら	前田夕暮	一
二 峠の茶屋	夏目漱石	七
三 安壽姫	森鷗外	二四
四 史蹟めぐり	大類伸	二四
巖島		二四
箱崎		二七
五 美しき球	矢島鐘二	三三



六 苗賣り(童謡)……………三九

    笛の音……………濱田廣介…三九

    苗賣り……………川路柳虹…四〇

七 母 親……………島村民藏…四三

八 自然玩具……………西條八十…四八

    自然玩具……………西條八十…四八

    お玉じやくし……………島木赤彦…五二

九 教化の力……………橘 南 谿…五五

一〇 杜鵑を聴きに……………若山牧水…六〇

二 蜘蛛の絲……………芥川龍之介…六六

三 感謝の生活……………三浦修吾…七九

三 快 活……………下田次郎…八六

一四 首ふり人形童謡……………九一

    首ふり人形……………水谷まさる…九一

    かくれんぼ……………若山牧水…九三

一五 晝 顔……………吉村冬彦…九五

一六 清 水……………荻原井泉水…一〇〇

一七 感慨多き角板山……………幣 原 坦…一〇六

一八 戦線より……………二八

    一 慰問袋の禮狀……………後野由衛…二八



二 廣東だより……………森脇康雄…二三

一九 鶉 飼……………里見 淳…二七

二〇 天然の教訓……………羽仁もと子…二三

二一 非常時の用意……………今井邦子…二九

二二 鳴く蟲の話…………………………一四三

二三 美しき国民性……………芳賀矢一…二四八

二四 恵まれた國土……………清原貞雄…二五六

附 録

手紙の心得…………………………服部嘉香



新修國文 四年制 卷一

前田夕暮  
歌人名は洋造  
明治十六年二  
五四三神奈川  
縣に生れた。

磐余の稚櫻の宮

奈良縣磯城郡  
安倍村池之内  
の地に當る。

一 さくら

前田夕暮

櫻の花は上つ世の麗しい木花開耶姫を聯想せしめる。  
遠い世の曙の國にほのくと咲く櫻の花によそへて名づけ  
られたといふ姫のあてやかに清らかな姿が薄霞を隔てて見  
えでもするやうに思はれる。

櫻といふ名のあらはれたのは、大和の磐余の稚櫻の宮が初め  
てであるといふことである。

「いはれのわかざくらのみや」といふ名の、いかばかり懐かしい

一 さくら

一



一 さくら

想像を喚び起すことであらう。うつすらと緑を敷いた圓い岡の

上の花明りに明るむ宮居のさまが、何といふことなしに若い日本を思はせる。

梅は早春の地にさむくと句ひ、櫻は晩春の空に明るく咲く。一は清らかな心を思はせ、一は美しい國土を思はせる。

櫻ほど種類の多い花はない。昔から名づけられた花の種類はどのくらゐあることであらう。彼岸



(筆象印本堂) 姫耶開花木

櫻吉野櫻、九重櫻、かば櫻牡丹櫻などは誰も知る花であり、千鳥櫻、

二

いづれ(何、孰)

ま先づ

吉野

奈良縣吉野郡

嵐山

京都市右京區

上野公園

東京市下谷區

井戸ばたの云

秋色女十三歳の時の句。秋色女は江戸時代の俳人。享保十年(二三八五)歿年五十七。

胡蝶櫻、小菊櫻などいふ名も古い本には見えるが、いづれもその花の形や感じの上から名づけられたものであらう。

櫻の名所としては、誰しもまづ指を吉野や嵐山に屈するであらう。また名木としては上野公園の秋色櫻の如きは、

井戸ばたの櫻あぶなし

酒の酔

の句によつて廣く知られるが、陽春四月、うら／＼と長閑な氣候にこそはれて咲出す頃には、全國到る所として花ならぬはない。日本を



櫻の野上

一 さくら

三



かやう(斯様)

落合直文

國文學者。宮城縣に生れた。明治三十六年(一八九三)歿。年四十三。

ひをどし(緋緘)

良寛

新潟縣出雲崎の僧。天保二年(一八五一)寂。年七十五。

櫻花國とは、よく言ひ得たものである。

かやうにその種類は多く、また全国的な花ではあるが、中にも若々しく、明るく、櫻の花のこゝろをよく表はしてゐるのは山櫻である。

落合直文の歌に

ひをどしの鎧をつけて太刀はきて

見ばやとぞ思ふやまざくら花

といふのがある。黄金作りの太刀を佩いた若い公達となつて山櫻を見たいといふ作者の感懐は、いかにもこの花の感じをよく表はしてゐる。

越の僧良寛は

わが宿の軒ばの峯を見わたせば



紅白 彼彼 岸九 櫻重 薄櫻 紅櫻 彼櫻 岸櫻 櫻染 井丹 吉櫻 野櫻 染櫻 井浦 吉櫻 野櫻 櫻



うかゞ(窺)ふ  
北原白秋  
歌人。詩人。名は  
隆吉。明治十八  
年(二五四五)福  
岡縣に生れた。  
まり(鞠)

浅  
——  
浅

かすみに散れる山櫻かな

と歌つてゐる。霞に散る峯の櫻を軒近く眺めて、喧噪の世界から  
遁れた作者の静かな生活がうかゞはれる。

また北原白秋の

まりもちてあそぶ子供をまりもたぬ

子供見ほるゝ山櫻花

には、あどけない童女のさまが、山櫻を背景にして簡素な畫趣を  
表はしてゐる。

同じ山櫻にしても、背景により、位置によつて趣を異にするが、  
麓の木立は新緑の色うつすらと煙り、夏浅い日の光を思はせる。  
五月半ば頃の、ひた／＼と青い空の色に觸れて、雪が消えたばかり  
の尾根にしる／＼と咲く原生林の山櫻程、この世ならぬ美し



秩父  
埼玉縣秩父郡  
の連山の稱。

さを感じさせるものはない。  
ある年の春、秩父の山に遊び、行暮れて樵夫の小舎にまろねを  
した朝のことである。谷川の雪解水で洗つた顔から、ほやくくと  
温かい湯氣の立つのを感じながら、薄紅を帯びた山櫻の嫩葉なほばを  
すつきりと晴上がった青空に仰いだ時の快さを、今に忘れるこ  
とが出来ない。

そして私は、ゆらくと風に揺られる若木櫻の皮を剥いで、繪  
だこにつけたうなりの音が、遠い少年の日の大空から響いて來  
る懐かしさを、今思ひ出でてゐるのである。

花の雲鐘は上野か淺草か  
奈良七重七堂伽藍八重櫻  
松尾芭蕉  
同

たこ(風)

夏目漱石

小説家。名は金  
之助。東京市に  
生れた。大正五  
年歿。年五十。

のぞ(覗く)

ひさし(庇)

竝並

文久錢



雞鶏

二 峠の茶屋

夏目漱石

「おい」と聲をかけたが、返事がない。  
軒下から奥をのぞくと、燥けた障子が立てきつてある。向側は  
見えない。

五六足の草鞋が寂しさうにひさしからつるされて、屈託氣に  
ふらりくと揺れる。下に駄菓子だ菓子の箱が三つばかり並んで、そば  
に五厘錢と文久錢とが散らばつてゐる。

「おい」とまた聲をかける。土間の隅に片寄せてある臼の上うすにふ  
くれてゐた雞が、驚いて眼を覺ます。くくくと騒さわぎ出す。敷居  
のそとに土べつつひが、今し方の雨にぬれて、半分ほど色が變つ  
てゐる上に、眞つ黒な茶釜ちやぶがかけてあるが、土の茶釜か銀の茶釜



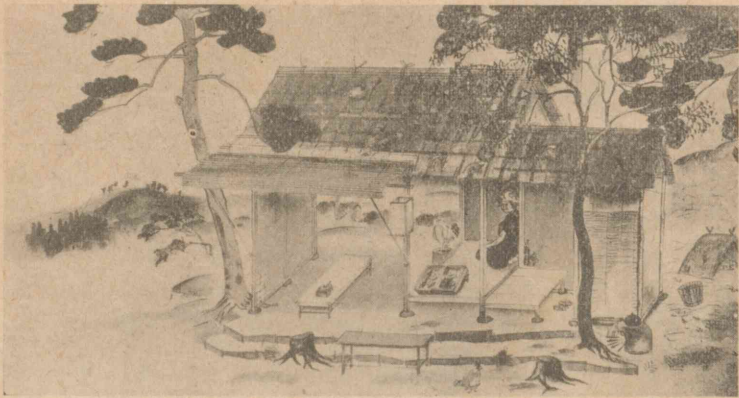
わか(分)る  
断 断  
腰 腰

優長 悠長  
をさま(收)る

かわからない。幸ひ下は焚きつけてある。  
返事がないから無断でずつとはひつて床几の上に腰をおろした。雞は羽ばたきをして、臼から飛びおりる。今度は疊の上にあがつた。障子が締めてなければ、奥まで駆抜ける氣かも知れない。雄が太い聲で「こけつこつこつ」といふと、雌が細い聲で「けつこつこつ」といふ。まるで人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。床几の上には一升枡程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを巻いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、頗る優長にいぶつてゐる。雨は次第にをさまる。

暫くすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりとあく。中から一人の婆さんが出た。どうせ誰か出るだらうとは思つてゐた。へつつひに火は燃え

のんき(暢氣)



(筆夫剛井白) 屋 茶 の 峠

てゐる。菓子箱の上に錢が散らばつてゐる。線香はのんきにいぶつてゐる。  
どうせ出るにはきまつてゐる。しかし、自分の店を開放しても苦にならないと見えるところが、都とは少し違つてゐる。返事がないのに床几に腰をかけて、何時までも待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。  
こゝらがまことに面白い。その上出て來た婆さんの顔が氣に入つた。



寶——寶  
寶生  
能の流派の一。

臺——台  
畫——畫  
はうき(簾)

余——予  
あいにく(生憎)

二三年前、寶生の舞臺で高砂を見た事がある。その時、これは美しい活人畫だと思つた。  
はうきを擔いだ爺さんが、橋懸を五六歩來て、そろりと後向になつて、婆さんと向ひ合ふ。その向ひ合つた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さんの顔が殆ど眞向きに見えたから、あゝ美しいと思つた時に、その表情はびしやりと心のカメラに焼きついてしまつた。

茶店の婆さんの顔は、この寫眞に血を通はした程似てゐる。

「お婆さん、此所をちよつと借りたよ。」

「はい、これは一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「あいにくなお天氣で、さぞお困りでござんしよ。おゝ、大分

ぬ(濡)れる

附——付

くりぬき(割貫)

ごま(胡麻)  
微——微

おぬれなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ。  
「其所をも少しもしつけてくれゝば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあお茶を一つ。」

と、立上がりながら、しつゝと雞を追ひさげる。ごゝゝと駆け出した夫婦は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏附けて、往來へ飛び出す。

「まあ一つ。」

と、婆さんは何時の間にか、くりぬき盆の上に茶碗を載せて出す。茶の色の黒く焦げてゐる底に、一筆書の梅の花が三輪、無造作に焼附けられてゐる。

「お菓子をと、今度は雞の踏附けたごまねちと微塵棒とを持つ



たすき(標)



うぐひす(鶯)

て来る。

婆さんは袖無の上からたすきを掛けて、へつつひの前にうづくまる。余は懐から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫しながら、話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「うぐひすは鳴くかね。」

「え、毎日のやうに鳴きます。こゝらでは夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、なほ聞きたい。」

「あいにく今日は、——先刻の雨でどこぞへ逃げました。」

をりから、へつつひの中がばちくと鳴つて、赤い火がさつと風を起して、一尺餘り吹出す。

蔭——蔭

「さあ、おあたり。さぞお寒かろ。」と言ふ。軒端を見ると、青い煙が突當つて崩れながらに、微かな痕をまだ板びさしにからんでゐる。「あゝ、いゝ心持だ。お蔭で生き返つた。」



夏目漱石

「いゝ工合に雨も晴れました。そら、天狗岩が見え出しました。」

透巡しゆんじゆんとして曇りがちな春の空を、もどかしとばかりに吹拂ふ山嵐やまのあらしの思おもひきりよく通り抜

けた前山の一角は未練もなく晴れ盡して、老嫗の指差す方に荒削りの柱のやうに聳たかえるのが天狗岩ださうだ。

〔章枕による〕



森鷗外

醫學博士。文學博士。陸軍軍醫總監。名は林太郎。島根縣に生れた。大正十一年歿。年六十三。

山椒大夫

由良の石浦にゐた長者。三莊大夫とも書く。

歸——歸

三 安壽姫

森鷗外

あくる朝、二人の子供は背に籠を負ひ、腰に鎌をさして、手を引合つて木戸を出た。山椒大夫の所に來てから、二人一緒に歩くのはこれが始である。

厨子王は姉の心を付りかねて、寂しいやうな、悲しいやうな思に胸が一杯になつてゐる。昨日も奴頭の歸つた後で、いろ／＼に詞を設けて尋ねたが、姉は一人で何事をか考へてゐるらしく、それをあからさまにはうち明けずにしまつた。

山の麓に來た時、厨子王はこらへかねて言つた。  
「姉さん、わたしはかうして久し振りと一緒に歩くのだから、嬉しからなくてはならないのですが、どうも悲しくてなりませ

たゝ(湛)へる

刈——刈  
邊——辺

ん。わたしはかうして手を引いてゐながら、あなたの方へ向いて、その禿になつたお頭を見る事が出来ません。姉さん、あなたはわたしに隠して何か考へてゐますね。なぜそれをわたしに言つて聞かせてくれないのです。」

安壽は今朝も毫光のさすやうな喜を額にたゞへて、大きい目を輝かしてゐる。しかし、弟の詞には答へない。たゞ引合つてゐる手に力を入れただけである。

そのうちに、去年柴を刈つた木立の邊に來たので、厨子王は足をとゞめた。

「姉さん、こゝらで刈るのです。」

「まあ、もつと高い所へ登つて見ませうね。」

安壽は先に立つてずん／＼登つて行く。厨子王はいぶかりな



石浦

京都府加佐郡

由良町字石浦

大雲川の左岸

大雲川

由良川ともい

ふ。福知山の方

から流れて來

て由良港に注

ぐ。

中山

大雲川の右岸

變——變

がら附いて行く。暫くして、雜木林よりは餘程高い外山の頂ともいふべき所に來た。

安壽は其所に立つて、南の方をじつと見てゐる。目は石浦を経て由良の港に注ぐ大雲川の上流をたどつて、一里ばかり隔たつた川向ひに、こんもりと茂つた木立の中から、塔の尖の見える中山に止つた。そして、厨子王やと、弟を呼び掛けた。

「わたしが久しい前から考へ事をしてゐて、お前とも何時ものやうに話をしないのを、變だと思つてゐたでせうね。もう今日は柴なんぞは刈らなくてもいゝから、わたしの言ふことをよくお聞き。あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ往くのはむづかしいし、引返して佐渡へ渡るのもたやすい事ではないけれど、都へはきつと往かれます。お母様と御一緒

岩代

今福島縣の一部。

棄——捨

樛子——餉筒

に岩代を出てから、わたしどもは恐しい人にばかり出合つたが、人の運が開けるものなら、善い人に出合はぬにも限りません。お前はこれから思ひ切つてこの土地を逃げ延びて、どうぞ都へ上つておくれ。神佛のお導きで、善い人にさへ出合つたら、筑紫へお下りになつたお父様の御身の上も知れよう。佐渡へお母様のお迎に往くことも出來よう。籠や鎌は棄てて置いて、樛子だけ持つて往くのだよ。」

厨子王は黙つて聞いてゐたが、涙が頬を傳つて流れて來た。

「そして姉さん、あなたはどうかしようといふのです。」

「わたしの事は構はないで、お前一人ですることを、わたしと一緒にするつもりでしておくれ。お父様にもお目にかゝり、お母様をも島からお連れ申した上で、わたしを助けに來ておくれ。」



烙印をせられ  
た云々

山椒大夫の許  
を逃出さうと  
して失敗し、今  
後の見せしめ  
にと額に烙印  
をされる夢を  
見たのをいふ。  
がまん(我慢)  
殺 殺  
澤 沢

「でも、わたしがあなくなつたら、あなたをひどい目に逢はせませう。」

厨子王が心には烙印をせられた恐しい夢が浮かぶ。

「それはいちめるかも知れないがね、わたしはがまんして見せます。金で買った婢をあの人は殺しはしません。多分お前がなくなつたら、わたしを二人前働かせようとするでせう。お前の教へてくれた木立の所で、わたしは柴を澤山刈ります。六荷までは刈れないでも、四荷でも五荷でも刈りませう。さあ、あそこまでおりて行つて、籠や鎌をあそこに置いて、お前を籠へ送つて上げよう。」

かう言つて、安壽は先に立つておりて行く。

厨子王は何とも思ひ定めかねて、ぼんやりして附いておる。

姉は今年十五になり、弟は十三になつてゐるが、女は早くおとな

びて、その上ものに憑かれた

やうに聴く賢しくなつてゐ

るので、厨子王は姉の詞に背

くことが出来ぬのである。

木立の所までおりて、二人

は籠と鎌とを落葉の上に置

いた。姉は守本尊を取出して、

それを弟の手に渡した。

「これは大事なお守だが、今

度逢ふまでお前に預けます。この地藏様をわたしたと思つて、

護刀と一緒にして、大事に持つてゐておくれ。」



(筆吉梅井荒) 王子厨と壽安



和江

大雲川の左岸  
中山の向ひ。

もら(貫)ふ

「でも、姉さんにお守がなくては。  
 「いゝえ、わたしよりはあぶない目に逢ふお前にお守を預けま  
 す。晩にお前が歸らないと、きつと討手がかゝります。お前がい  
 くら急いでも、あたり前に逃げて行つては追附かれるにきま  
 つてゐます。さつき見た川の上手を和江といふ所まで往つて、  
 首尾よく人に見附けられずに向河岸へ越してしまへば、中山  
 までもう近い。其所へ往つたら、あの塔の見えてゐたお寺には  
 ひつて隠しておもらひ。暫くあそこに隠れてゐて、討手が歸つ  
 て來た後で、寺を逃げてお出で。」  
 「でも、お寺の坊さんが隠して置いてくれるでせうか。」  
 「さあ、それが運だめしだよ。開ける運なら、坊さんがお前を隠し  
 てくれませう。」

「さうですね、姉さんの今日おつしやる事は、まるで神様か佛様  
 がおつしやるやうです。わたしは考をきめました。何でも姉さ  
 んのおつしやる通りにします。」  
 「おゝ、よく聽いておくれだ。坊さんは善い人で、きつとお前を隠  
 してくれませう。」  
 「さうです。わたしにもさうらしく思はれて來ました。逃げて都  
 へも往かれます。お父様やお母様にも逢はれます。姉さんのお  
 迎にも來られます。」  
 厨子王の目が姉と同じやうに輝いて來た。  
 「さあ、麓まで一緒に行くから、早くお出で。」  
 二人は急いで山をおりた。足の運びも前とは違つて、姉の熱し  
 た心持が暗示のやうに弟に移つて、行つたかと思はれる。



泉の湧く所へ来た。姉は標子に添へてある木の椀を出して清水を汲んだ。

「これがお前の門出を祝ふお酒だよ。」

かう言つて一口飲んで弟にさした。弟は椀を飲みほした。

森 鷗 外



「そんなら姉さん、御機嫌よう。きつと人に見附か  
らずに中山まで参ります。」

厨子王は十歩ばかり残つてゐた坂道を、一走りに駆けおりて、沼に沿うて街道に出た。そして大雲川の岸を上手へ向つて急ぐ

飲  
吞

藁  
藁

のである。

安壽は泉の畔に立つて、並木の松に隠れては又現れる後影を小さくなるまで見送つた。そして日は漸く午に近附くのに、山に登らうともしない。幸ひに今日はこの方角の山で木を樵る人がないと見えて、坂道に立つて時を過ごす安壽を見咎める者もなかつた。

後に同胞を捜しに出た山椒大夫一家の討手が、この坂の下の沼の端で、小さい藁履を一足拾つた。それは安壽の履であつた。

(山椒大夫による)



大類伸

歴史家。文學博士。東北帝國大學教授。明治十七年(二五四四)東京市に生れた。

四 史蹟めぐり  
嚴島

大類伸

潮の速い幅約一キロメートルの海峡を、白く塗立てた鐵道連絡船で、私が嚴島の波止場に著いたのは櫻はとうに散つて、風は暖かに、山河の姿も何となく長閑な頃でした。

私は暖かい春の一日を、嚴島の此所彼所と遊び歩きました。波止場から立並んだ兩側の店に、土産物や細工物が澤山並べられてあるのを一々見て歩きました。

紅葉谷は樹木鬱蒼として、泉石の趣に富んだ幽邃の境でした。其所の旅館に私は泊つてゐたので、その趣をいふと、すてきなところだ、歌の濱の松原には、鹿が多く遊んでゐました。奈良の鹿程には

潮 鐵 著 兩 館 濱  
汐 鉄 着 兩 館 濱

ちやうど(丁度)

大願寺

眞言宗。龜居山放光院と稱す。

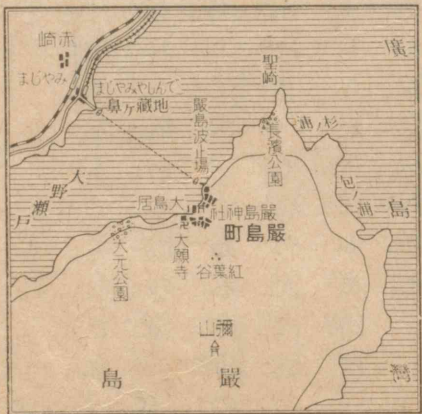
彌山

嚴島最高の山。御山ともいふ。四五五米。

旅人に馴れてゐませんが、それでも食物を求めて寄つて來ます。かの海中に聳えた大鳥居を眺めるには、この邊がちやうど宜しいのです。

また大願寺には無数の鳩がゐて、豆を撒くと、恐しい羽音を立てて集つて來ます。豆皿を持つてゐると、鳩は手から肩から頭まで一杯にとまります。旅の身にはこんなことも楽しみなのです。

遊び暮らして嚴島神社へ來た時は、日ははや後に聳える彌山の蔭に隠れて、四邊が漸く暗くならうとする頃でした。海へ造り出されて、幾重にも折れ曲つた長い





廻  
—  
廻



二人の巫女を認めました。

廊下は、全く水の上にあるのです。この廊下は百九十六メートルあるといひますが、塵もない板張の  
廣い廊下を、軽やかに歩き廻る心地  
は、何となく愉快なものでした。私は  
殿奥、深く造られた暗い本殿の邊に佇  
んで、遠く海上に突出てゐる廊下の  
彼方に、遙かに暮行く海の面に眺め  
島入つてゐました。廊下の中央には、一  
段高い四角な舞臺があります。その  
舞臺の先の方に大きな燈籠が立つ  
てゐますが、その根元の臺石の邊に、

宮崎宮

官幣大社、宮崎  
八幡宮ともい  
ふ。  
灣—湾

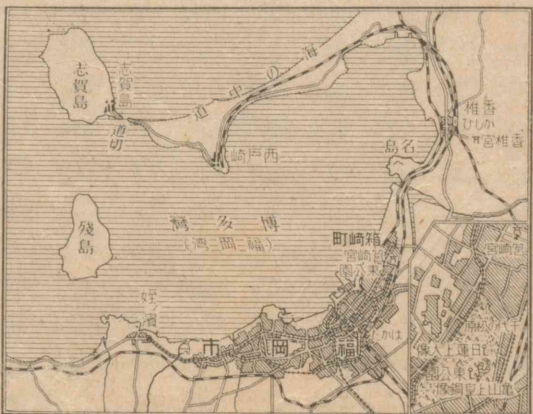
薄い靄のかゝつた夕方の事でしたが、白い衣服に緋の袴を著  
けた十二三位の少女が二人、一人は高く立ち、一人は低く跪いて  
ゐる姿が、はつきりと私の目に映りました。一日の神への勤をを  
へて、暫くの暇をこの廻廊に出て、清らかな影を水に映してゐた  
少女は、互に何を語つてゐたか知りませんが、この時、この場合、こ  
れ程四邊の空氣と調和してゐるものはなかつたのです。所は嚴  
島の社頭です。極めて優美に造られた柱も、勾欄も、すべて丹塗の  
建築です。私は巫女姿の少女程、これに似合ふものはないと思ひ  
ました。それ程嚴島の御宮は、優しい建築なのです。

箱崎

宮崎宮は、九州第一の都會福岡市から、東の方凡そ三キロメー  
トルばかりの所にあります。博多灣の波に近く、あたりは一帶の



松林で、千代の松原と呼ばれてゐます。波穏かな博多灣の沿岸は、目の及ぶ限り白砂と青松とばかり、その間に遙か遠く人家の群がつてゐるのが見えます。それが福岡の市街です。春の日の麗かさを受けて、博多灣の水は、それはく濃い藍色をしてゐます。さうして、それが灣を縁取つてゐる白砂青松を一層美しく見せるのです。殊に薄く霞んだ海上には、残島や、志賀島が小山のやうに浮かんでをり、また海の中道と呼ぶ細い半島は、髪の毛のやうに細く長く續いてゐます。

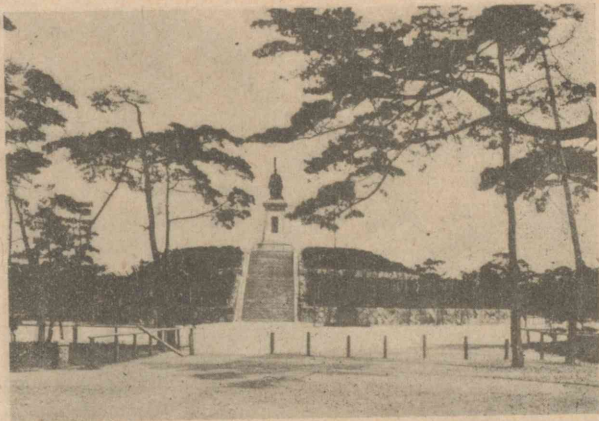


四月の末、この地方の人々は、麗かな一日を楽しく遊び暮らさうとして、辨當や毛氈などを用意して、一家擧つて千代の松原から箱崎宮の海岸へと出掛けるのです。私は一人旅の身で、知らない土地の知らない人々の間に來てゐるので、何となく楽しさうにしてゐる人々の間に立ちまじつて、半日を面白くこの海邊に過ごしました。かの敵國降伏の額の掛けてある宮崎宮の樓門から、海岸へ向つて眞つ直に通つてゐる大路——ちやうど鎌倉の鶴岡八幡から、由比濱に



挿圖

圖の中央彼方に小さく見えるのが龜山上皇の御銅像である。



千代の松原

向つてゐる若宮大路に似てゐる——その大路の盡きる所岸を洗ふ浪に臨んで聳えてゐる大きな石燈籠それ等は今でも私の眼底に明らかに残つてゐます。

千代の松原は福岡の東公園になつてゐます。所々に茶店が出てゐて、年中遊ぶ人が絶えません。池の中には緋鯉が澤山ゐます。旅人はそれには興を遣るので、松原の間を彼方此方とさまよつてゐますと、ゆくりなくも一つの廣場へ出ました。其處には高い記念像が立つてゐました。全部石造

おもしろい時間を

龜山上皇  
第九十代の天皇

辭——辭

日蓮上人  
日蓮宗の開祖  
安房の人。弘安  
五年（一九四二）  
寂年六十一。

で高い立派な臺の上に、束帶姿の氣高い方が立つてをられます。これは蒙古の大舉來寇に際して、畏くも身を以て國難に代らうとなされた龜山上皇の御像で、元寇との深い御關係から、この古戰場に建てたのです。神々しい御姿で、屹然と松林の上より、海の彼方遙かに異國の空を望んでをられる有様は、實に勇壯の極みと申したい程です。

この御像の前を辭して、暫く歩いてゐますと、また松林の間から、突然眞つ黒な大法師の現れたのにびっくりしました。それは日蓮上人の大銅像でした。上人は蒙古襲來の以前に安國論といふものを書いて、國民が信仰を怠ると、いづれ大國難に合ふであらうと警告したのでした。が、やがて蒙古襲來といふ大事件が起りましたので、人々は日蓮の豫言の當つたのに驚きました。さ



關——関  
參——参

小早川隆景  
毛利元就の第三子。小早川正平の養嗣子。慶長二年(二二五)歿。年六十五。様——様

うして、上人を信じました。その関係で銅像を此所に建てたのです。銅像の前には参詣者が絶えません。始終線香の煙が濛々と立つてゐます。

それから少し行つたら、管崎宮の樓門の前へ出ました。この樓門も、御宮の御殿も、元寇當時のものではなく、三百餘年前小早川隆景の建てたものです。しかし、いかにも神さびた建物で、神威の程も察せられません。私が参詣した時には、門前に鳩が澤山飛んでゐて、いかにも平和の有様で、昔此所が戦場であつたなどとは、どうしても思はれません。社<sup>のあたり</sup>を徘徊してゐる間に、日も暮方になりましたので、遊び疲れた人々の群にまじつて、私も福岡の旅舎へ向ひました。

(史蹟めぐりの文による)

矢島鐘二

教育家、體育家。明治十六年(二五四)三群馬縣に生れた。

チルデン

アメリカの庭球選手(西紀一八九三—)

清水

名は善造。庭球選手。明治二十四年(二五二)群馬縣に生れた。

凍——凜

決——決

慘澹——慘澹

五 美しき球

矢島鐘二

戦の幕は切つて落されました。此所ニューヨークを距る三十二キロメートル、理想的運動場として有名なフォレストヒルの清らかなグラウンドの上には、白線が美しく浮いて、何となく純化されさうな気分が漂つてゐます。米國の老幼男女は勿論、世界各國のファンは、ひとばかりにグラウンドの圍りに詰めかけて、兩選手の出場を待構へてゐました。チルデン君の上に幸福あれかしと祈る人の心と、清水君の上に幸運あれかしと祈る人の心とが平和の光のうちに交錯してゐました。

この光のうちに、この無聲の應援のうちに、凜とした決意と慘澹たる苦心とを想はせつゝ、微笑を浮かべて、兩選手はテニスコ



だめ駄目  
さゝや(囁く)

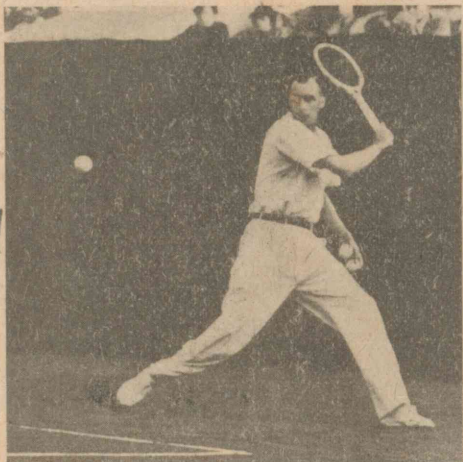
蓋 — 蓋  
隙 — 隙

さ(牙)える

亂 — 乱

トに現れました。身長百六十五センチメートルの清水君が、百八十八センチメートルのチルデン君に向ふのですから、まるで子供が大人と試合をするやうであります。観覧席の人々は異口同音に、氣の毒だが、清水君はだめだらう。とさゝやき合つてゐました。  
火蓋は切られました。隙を窺ひ虚を衝く、さながら龍虎の争です。秒一秒、チルデン君と清水君との球はさえて來ました。観覧者は球の動くまゝに、その瞳を忙しく右に左に動かしてゐました。と、或瞬間、一心不亂に視入つた彼等の瞳に、忽ちチルデン君の片足滑らして取亂した姿が映りました。彼等のはつと思ひました。この時です。清水君がチルデン君の血走つた眼元に、取亂した脚元に、柔かい程のよい球を送つてやつたのは、この刹那に於ける

さ(七つ)く



清水君は、チルデン君に對する任侠の精神に燃えて、自己の優勝に對する名譽の感情などは、全くうち忘れてしまつたのでした。

「ミスター・シミツ」の歡呼の聲と

共に、米人三萬の手は、林の如く一

チ 齊に振上げられました。

ル この美しき球。この美しき歡呼。

デ 私は清水君も清水君だが、米人も

ン 米人だと深く感じました。初めコ

トに出た時、チルデン君の眉宇

には、清水君に對する悔蔑の情が

ありくと見透かされましたので、心ある米人は、その態度に少からず不安の念を懷いてゐました。然るに、清水君は出場早々、こ



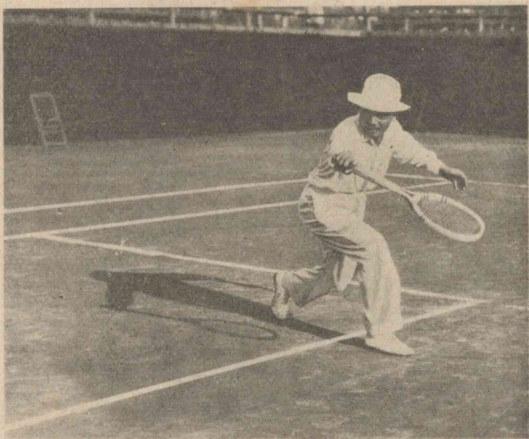
深切—親切

舊—舊

かつ(且)

ひいき(最良最負)

いはゆる(所謂)



清水善造

の冷い侮蔑に報ゆるに温情春の如き優しい球を以てしたので  
す。この深切は電氣のやうに米人の胸に響いて、彼等の心の底か  
ら感激を湧上がらせました。英人  
は、日英同盟の舊誼もあり、かつは  
日本の應援者の少い関係も手傳  
つてか、すつかり清水君びいきに  
なつて、盛んに同君に拍手を送り  
ました。當時ニューヨークに、群馬縣  
人が五十五人をりましたが、彼等  
はいはゆる上州長脇差の氣象か  
ら、この日は總動員で應援に出掛  
けました。これ等敵身方總掛りの歡呼は、單なる清水君の妙技に

上泉伊勢守

戰國時代の劍  
客神陰流の開  
祖名は秀綱。上  
野の人。

發したのではなくして、その尊い任侠の精神に對する力強い感  
激に發したのです。清水君と同郷の劍聖たる上泉伊勢守も、定め  
しでかした清水と叫びつゝ、莞爾として笑を地下に含んだこと  
でありませう。

時は一點一分を争ふ時であります。清水君が五、六、七、八の四箇  
月にわたり、十二箇國の選手を薙倒して、最後の決勝に入つた時  
であります。若し、今明二日間の米選手との競技に於て勝を制し  
得たならば、日本で最初のデビス・カップを獲得する事が出来るの  
であります。この時に當り、チルデン君の失策に對して、同情に充  
ちてゐる優しい球をその手許に送つた清水君は、實に偉い方で  
あると思ひます。清水君が、我は我にして我にあらず、實に神州男  
兒を代表して立つてゐるのであるといふ事を自覺してとつた



この態度には、全く敬服する外はありません。  
 私どもは人格の修養といつて、いきなり釋迦や孔子の眞似を  
 しようと思つても、なか／＼むづかしい。私どもにとつて一番近  
 路の修養法は、お互に深切同情を以て相接するといふ事であり  
 ます。武士は相身互ひといひ、その敵を愛せよといふ語は、まこと  
 に尊い教訓であり、また永久の眞理であります。時代はいかに推  
 移しませうとも、フォーレスト・ヒルに於て發揮された清水善造君  
 のその敵に對する任侠の態度と、貴くも美しいその球の精神と  
 は、蓋し世界庭球の歴史に特筆大書されて、永久に燦然たる光輝  
 を放つ事でありませう。これ獨り我が清水君の名譽であるばかりで  
 なく、實に我が日本男兒の名譽であります。

(スポーツマンの精神による)

濱田廣介

詩人、童話作家  
 明治二十六年  
 (二五五三)山形  
 縣に生れた。

鼓——鼓

六 苗賣り (童謡)

笛の音

濱田・廣介

日本よい國ゆめの國、  
 日永の獅子まひきこえます。  
 町のはづれに鳴る太鼓、  
 ピーピーピラリと笛の音。  
 お空は青空ゆめの上に、  
 てんまり櫻、  
 ふつくりふくれて眠さうに、



ピーピーピラリと笛の音

坊やはねんねん眠りましよ、

御門のお犬もねむさうな、

お庭の鶏こっこもねむさうな、

ピーピーピラリと笛の音。

川路柳虹

詩人、美術評論家、名は誠、明治二十一年(二五四八)東京市に生れた。

苗賣り

川路柳虹

並木の柳の葉がゆれる、

柳の葉つばをゆる風に、

ことしもまた来た苗賣りの、

涼——涼

きうり(胡瓜)とうがん(冬瓜)



へちま(米瓜)



八瀬

京都府愛宕オタゴ郡八瀬村、鞍馬同郡鞍馬村。

涼しい聲が 町から町へ。

きうり、とうがん、

へちまの苗——

うす日のもれる水菓子屋、

青い葉つばに日がゆれる。

ことしもまた来た苗賣りは、

八瀬の男か 鞍馬の男か。

きうり、とうがん、

へちまの苗——



島村民藏  
 文學者劇研究  
 家明治二十一年  
 (二五四八)東京  
 市に生れた。  
 ラファエル  
 (西紀一四八三  
 一五二〇)

七母親

島村民藏



マドナと聖ヨハネ(ラファエルの筆)

皆さんは大抵イタリーの有名な畫家のラファエルの描いたマドナマドンナの像を知つてゐるでせう。一體マドナマドンナのやうな婦人は、實際この世の中にあるのでせうか。多分ゐないでせう。では、どうしてラファエルにあゝいふ繪が描けたのでせう。ラファエルはあの繪に就いて、自分で話した事があります。

纏——纏

こしら拵へる

比||較

のぞ(覗く)

大勢の母親を見て歩いて、どの母親にもある一つの美しい點を見附けて、蜂が蜜を集めるやうに、それをすつかり寄せ集めて、あの一幅の名畫の中に纏めたのださうです。

ですから、あの繪にある氣高さと淨らかさとは、ラファエルが勝手にこしらへ上げたものではなく、平常の生活から採集したものだといふ事が皆さんにわかつたでせう。

マドンナの神カミナリのやうな純潔と比べられる婦人は、この世にはありません。けれども、我が子の顔をのぞく母親の顔カミナリのうちに、神聖な、神々しいカミナリ或物が表はれてゐます。論より證據、ためして御覽なさい。マドンナの繪を見た後では、皆さんは前までとは全く別な眼で自分のお母さんを見るに相違ないでせう。夕方、赤ん坊の寢床をのぞいたり、皆さんの弟や妹を抱きしめて顔を見た



さ(射)す

みなぎ(漲)る

残—残

りする時、また皆さんが病氣をして看護される時、さういふ時のお母さんの様子を注意して御覽なさい。頭から後光がさしてゐないでせうか。本物の後光はさしてゐませんが、しかし、さういふ瞬間には、お母さんは自分の事などは全く忘れて、たゞもう子供の事ばかり考へてゐるので、そこで顔の上に天女のやうな氣高さがみなぎり溢れるのです。

ですから人はよく、自分のお母さんは天使のやうな方だ。と言ふのです。

世間には天使らしい母親が澤山あります。さうかと思へば、またまことに優しい、いゝ母親ではあるが、がまんのない爲に、すぐにくわつとなつて、子供にむごくするものもあります。ラファエルはさういふ事を残らず見聞きしました。さうして、その中に氣高い或

嘸—話

禮—礼

物を見たのでした。皆さんのうちで、お母さんに對つて、どんな場合でも、慎深く、愛情の濃やかな人があれば、その人は、ラファエルの眼を持つてゐるのです。この人には、母親の崇嚴な本體が見えるのです。

私は何時か一人の男の話を聞きました。その人の母親は、お伽嘸に出で来る、悪い狼のやうに、手の附けられないひどい女でした。けれども、その人はいかに、もの優しく母を敬ひました。なぜお前は親にされた通りにしてやらないのか。と人に聞かれると、私にはそんな事は決して出来ない。子供を抱いた母親は、どれもこれも私には神聖だから。自分の母は一人の子供を育て上げた人だから、たゞ自分は一生母に禮を盡すのみだ。と答へたさうです。



随一從

わづか(僅、纒)

私がよく見掛けるのは、息子や娘達が大きくなるに随つて、次第に母親に對つて粗暴不遜になる事です。非難をする時、それは母のせゐだ。母は何かにつけて口やかましく小言を言ひ、粗暴不遜の風を見せるから。と返答しますけれども、なぜ母親の癩癩は募るのでせう。なぜ神経が過敏になるのでせう。皆さんがわづか一晚よく寝られないだけでも、どれ程神経が昂ぶつたり、不機嫌になつたりするか考へて御覽なさい。皆さんのお母さん達は、皆さんの爲にどれ程多くの夜を眠らなかつた事でせう。皆さんが病氣になつた晩ばかりでなく、お母さんが皆さんの失策などを苦に病んでまどろまなかつた夜までも入れて言ふのです。その上、どれ程澤山な艱難辛苦にお母さんは堪へなければならぬか、皆さんにはわかりますか。さういふ艱難辛苦は、皆さんが大人

になつて始めて聞かされて承知するか、それとも一生知らずに終るのです。皆さんの爲に犠牲にした睡眠を取返す爲には、お母さんはまる一年間、晝夜寢通しに寝る必要があるくらゐです。ところが、お母さんにはさういふ暇がないので、そこで自然神経は昂ぶり、せつかちになり、怒りつぽくなるのです。皆さんのうちで、お母さんが自分の爲に身體を悪くしたのに氣の附く人は、お母さんに對つて、失禮な、恥知らずな挨拶をした時、何時もきつと耳もとまで赧くなるに相違ないでせう。(フリードリヒウイヘルム、フェンステル著、少年少女訓より譯出)

こゝろ下ろすな



西條八十

詩人。早稻田大學教授。明治二十五年(二五五)東京市に生れた。

下田

静岡縣賀茂郡下田町。

蓮臺寺温泉

同縣同郡稻生澤村にある。

下賀茂

同郡南中村の字。

雲雀



八 自然玩具

自然玩具

西條八十

數年前の春、四月末から五月の初へかけて、伊豆の下田に近い蓮臺寺温泉に滞在してゐた事があつた。その頃のある晴れた一日、わたしは一人で五里ほど離れた石廊崎へ見物に出掛けた。朝早く、下田から乗合馬車に乗つて、下賀茂といふ所でありた。それからぼつ／＼青麥の畑や、やぶたゝみの深いさゝやかな峠路などをたどつて行つた。路はをり／＼下つて濱へ出た。こここのたり／＼と冷い春の潮が寄せてゐる黒い砂地には、木の香の高い新造船などが置いてあつた。その蔭から、若い船大工が顔を出した。すぐ後が畑なので、雲雀は高く潮風の中でさへづつて

手石

同郡竹麻村の字。

歳——才

田牛

同郡朝日村の字。

豊——豊

ふと(不圖)

みた。

手石といふ字にかゝつた頃、わたしは一人の若い婦人と連れになつた。その婦人は二歳位な男の子をおぶつて、赤い手がらの丸鬚まるまげに結つてゐた。何でも田牛たうしといふ近くの村落にかたづいてゐるのが、久しぶりに實家へ歸るのだといふ事であつた。かの女は天然の海産物に豊かに恵まれた良人の村の事を、誇りかに語つた。

わたしは一里程その婦人と一緒に歩いて行つたが、ふと妙な事に氣が附いた。それは、をり／＼背の兒がむづかつて泣出すと、かの女は極めて巧妙に、すぐそれを黙らせてしまふ事であつた。





ぼけ(くさぼけ)



椿



小米櫻(しじみばな)



歎—嘆

大瀬

同郡南崎村の字。

女の足の後れがちなので、わたしには最初かの女がどうするのかわからなかつたが、注意して見ると知れた。かの女は兒が泣くたびに、すぐと路端の花を何か折り取つて、これに持たせた。さうして兒がそれに飽きると、また別の花を與へるのであつた。最初はぼけ、それから椿、それから小米櫻こめざくらといふ風に……。さうしてまた、兒はそのたびごとに涙ををさめて、新しい花を驚異の眼でじつと見守るのであつた。

「神が與へた自然の玩具。」——これを見て、わたしはかう感歎すると同時に、都會に暮らしてゐる自分の娘達のことを寂しく想ひ出した。あくどい色彩のブリキやセルロイドの玩具の群の中で育てられてゐる彼等を。

大瀬といふ字でその婦人と別れてから、わたしはその玩具の

事から、更に自分の都會的な藝術にまで思を走らせて、憂鬱な心持で石廊崎へと登つて行つた。

お玉じやくし

島 木 赤 彦

島木赤彦

歌人。本姓名は久保田俊彦。長野縣に生れた。大正十五年歿。年五十一。  
雜司ヶ谷  
東京市豊島區。

先年私が雜司ヶ谷に住んで、妻子を信州から呼寄せた時のことである。純粹の農村から急に東京に來たのであるから、生活様式が激變して、妻も子供も少からずめんくらつたやうである。特に子供に一日もなくてはならぬものは、遊仲間のお友達であるが、東京の子供とは殆ど隔絶した言語や習慣をもつてゐる私の子供は、隣近邊の子供等をすぐに遊仲間とするに都合が悪かつたらしい。東京に著いて二三日すると、もう寂しがり始めた。東京はいゝ所でないと言ひ出した。

ある日、九歳になる次女と、七歳になる末男とが、尻をからけて、



護國寺

東京市小石川  
區大塚坂下町  
新義眞言宗豊  
山派。

疋  
〓  
匹



島木赤彦

泥だらけのバケツを提げて歸つて來た。バケツの中にはお玉じやくしが一杯にうよついでゐる。何所から捕つて來たのか。と聞いたら、護國寺境内の池からだ。といふ。そんなに澤山いらぬだらう。四五疋残して、あとを捨てる。と言つてもなかなか聞入れない。泥だらけのお玉じやくしを水に洗つて、清淨なバケツに移して、水中を泳がせてゐる。子供と一緒になつてそれを眺めてゐると、なか／＼面白い。まるでお玉じやくしの渦卷である。渦卷の一つ／＼が皆生きてゐる。目も鼻もないや

すが(縫)る

うな大きな頭にすぐ尾がついて、左右に動いてゐる。私はそれを眺めながら考へてみた。子供は東京に來て取付き所のない孤獨な者になつてしまつた。たま／＼護國寺境内に行くと、其所の池の中に、子供等の舊知の友達があつた。それがお玉じやくしである。捨てると言つても捨てられないのは無理がない。このお玉じやくしは、子供等の今まで馴れ親しんだ生活や習慣にすぎる一本の糸である。その糸を手から離せといふのは無理である。子供等は、夜はそのバケツを枕元に置いて眠つた。捨てられてはならぬと思つたのであらう。

田舎の子供は、多く自然物を相手にして生活してゐる。明朗な日光と、清澄な空氣と、溫柔な大地。大地の上に生育する草木と、その間を流れる水とは、彼等の生活の全體と終始してゐる。それに



むし(撈、巻るをがら(芋殻)

諏訪湖

長野縣の中部にある。

は(穿)く

比べると、都會の子供は殆ど人工物を相手として生活すると言つていゝ。玩具にしても、田舎の子供は多く自然物を用ひて自分で製作する。青芝をむしつて姉様を作り、をがらを以て水車を作り、草の葉で笛を作り、笹の葉で舟を作り、麥稈で馬を作るといふやうな事は、都會の子供の想像にも及ばぬところであらう。私の子供は、寒中諏訪湖の氷を割つて捕つた小魚を手桶の水に入れて、よく山の水田へ放しに行つた。山の田までの路はかなり急であつて、それに雪が積もつてゐる。その雪路を、足袋もはかずに登つて行く。魚を放す面白さに、素足の寒さを忘れてゐるのである。さういふ生活は私の子供に限らず、田舎一般の子供に通じてゐるのである。

橋南谿

江戸時代の醫師、國學者。本名は宮川春暉。伊勢の人。文化二年(二四六)歿年五十三。

中江藤樹

江戸時代の儒者。名は原。世に近江聖人といはれる。慶安元年(三〇八)歿年四十一。

大溝

今滋賀縣高島郡大溝町。

小川村

今滋賀縣高島郡青柳村の字。

九 教化の力

橋南谿

中江藤樹先生は俗稱を興右衛門といひ、江州大溝在なる小川の百姓の家に生れ、<sup>王陽明の流を汲みて、その德行一世に秀で、遠近皆その風を望まざるはなかりきといふ。</sup>熊澤蕃山は先生の門人なり。この人の先生に従ひし始を尋ねるに、面白き話あり。

その頃、加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州河原市より馬を雇ひて、榎木の宿に到りて泊りぬ。馬方河原市へ歸りて、馬を洗はんと鞍を解きつれば、財布一つ出でたり。取上げて見れば、金二百兩あり。大きに驚き、急ぎ榎木に行きて、かの飛脚の泊れる宿に到り、對面して委しく尋ね問ふに、その人の忘れし



王陽明

王陽明  
明の大儒  
熊澤蕃山

江戸時代の儒者。京都の人。元祿四年(二三五二)歿年七十三。

悦—喜



中へこの高恩なかく言葉の言ひ盡すべ  
江きにあらずれどもまづ當座の御禮ま  
藤でにこれを贈り奉る。と涙を流して喜  
樹ぶ馬方大きに驚ける面持にてそなた  
の金をそなたに取納め給ふに何の禮

といふことあるべきとて手にだに取らず

いろくこしらへ言へども更に受けずして歸らんとする  
故止む事を得ず十兩となし五兩となし三兩となし次第に減じ

終—遂

いさゝか(些、聊)

挿圖

藤樹書院は中江藤樹が青柳村(小川村)に開いた塾である。

て終には金二分となしせめてこればかりはと理を盡し詞を盡して言ふにこの金を受くる程ならば二百兩をも留め置くべし。かく返し申すからにはいさゝかにても謝禮を受くるは我が心にあらず。されど餘りに餘儀なく宣へばさらば鳥目二百文を賜へ。これは今夜休むべきところをこれまで追掛け來れる賃錢なり。これは我が取るべき錢なれば申し請くべし。と言ひて二百文を懐にし歸らんとす。  
飛脚は感に堪へかねてその氏素性を尋ね問ふに名ある者に



院 書 樹 藤

おんたち



あらず。また何一つ知れる者にもあらず。たゞ我が里の近くに、小川村といふ所あり。其所に興右衛門といふ人おはして、夜毎に講釋といふ事をせらる。それがしもをりふし行きて聴き申したるに、親には孝を盡すべし、主人は大切にすべきものなり、人の物は取らぬものなり、無理非道は行ふべからずなどいふこと、常に語り給ふにより、今日の金子も我が物にあらざれば、取るべきことわりなしと心得しまでの事なり。と言捨てて、歸りぬ。

飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、さても此度からはからき命生き延びて、各方にも對面する事を得たり。とて、ありし次第を委しく語りけり。

蕃山をりふし田舎より上りゐて、學問修業の最中なりしが、この物語を聞きて、その人こそまことの儒といふものなれ。とて、翌

ともかく(兎も角)

備前侯

岡山の城主池田光政。

日すぐに江州に到り、小川村に藤樹先生を尋ねて隨從を願ひたるに、人に教へ申す程の學徳なし。とて、更に許し給はず。蕃山ひたすらに願ひて、二日が間先生の門に佇みて歸らず。先生の老母これを氣の毒がり、ともかくも内に入れ申せよ。とあるに、いなみがたくて、内に入れ、遂に師弟の契約をせられけりとぞ。

その後、先生を備前侯の招き給へる時、その身は病身なりとて固く辭し、門人に熊澤といふ者あり、御役にも立つべき者なり。とて、蕃山を出されけり。

いづれも格別の事どもなり。

(東遊記の文による)

明治天皇御製

よきたねをえらびくゝて教草うゑひろめなん野にも  
やまにも



若山牧水

歌人。名は繁。宮崎縣に生れた。昭和三年歿年四十四。

杜鵑(時鳥)不如歸



間

一〇 杜鵑を聴きに

若山 牧水

「箱根へ行かう。蘆湖ではきつと今、杜鵑が鳴いてゐるに相違ない。」  
 かなり更けたが、まだ其所だけ明放つてある雨戸の間から、灯影の流れた庭先の闇の色をうつとりと眺めながら、私はちやうどその時、沼津の家に遊びに来てゐた友にかう言ひ出した。濕りを含んだ夜風が、庭木の柔かな葉むらを動かしてゐるのを見てゐると、不意にこの鳥の鋭い聲が身に感ぜられた。  
 「さうだ、あそこに限る。もうきつと鳴いてゐるよ。」  
 私の追つかけて言ふ言葉と共に、話はすぐきまつた。小田原へ廻らずに、三島から舊道を登つて蘆湖へ出る。そして其所に一泊



若山 牧水

するといふ風に、さうきまると、話をやめて、すぐ二人とも床にはひつてしまつた。床にはひりながらも、私には湖水の縁で鳴いてゐる鳥の聲が、あれこれと想像された。殊に一夜眠つた明方の湖水の静けさ、恐らく深々とあたりの山腹に動いてゐるであらう朝靄の眞白さ。その中を鳴いて渡る杜鵑の聲。若葉の輝き。すべて身近にまじくと見るやうな氣がして、

なか／＼に寝つかれない程であつた。  
 翌朝九時、二人とも草鞋をはいて門を出た。初夏の頃にありがちな朝曇の深い空であつた。三島の宿を出外れると、すぐ箱根の



普——普

舊道の上りになるのだが、何時の間に改修されたのか、名物の石疊道はすっかり石が掘出されて、普通の砂利敷道に變つてゐた。雲助や、ごまのはひや、關所ぬけや、または種々の仇討や武勇談などの聯想されがちであつたこの名高い關所道も、終に舊態を改めねばならなくなつたのかと思ひながら、長い松並木の蔭を登る。山にかゝつた頃から空は晴れて、後に富士がさえて來た。四里の坂道を登り盡して、峠の青草原から眞下に蘆湖を見おろした時、はさすがにいゝ心持であつた。水の色も柔かく、殊に向岸の權現の社からかけて、大きな森林に萌立つ若葉の渦巻のすが／＼しさ。その手前に聳える岬の上の離宮の輪奐の輝かしさ。すべて皆明るい眺に満ちてゐた。眞つ青な上に白い波を立てて走つてゐる一、二のモーターボートも、親しい思をそゝつた。

さすが(流石)

權現の社

箱根神社。國幣

小社。蘆湖の東

南岸にある。

萌——萌

満——満

漣 さゞなみ小波

行々子



程なく或宿屋の離室に私達は落著いた。部屋の硝子窓の下には、すぐさゞなみがちや／＼と微かな音を立ててゐる。廣々と山から山の根を浸した湖の面を、坐りながら眺めることが出來た。

暫く休んだ後、一浴して上がつて來ると、湖には一面に夕空の明るい光が映つてゐた。庭先の石垣の上にぬれ手拭を下げて立つてゐると、少し離れた山の根の岸で、頻りに何やら鳥の鳴いてゐるのが聞える。そのみづ／＼しい音色から、確かに水鳥の聲と察せられるが、行々子とも違ふし、友



湖 / 蘆



巢  
—  
巢

説明のしるし

もその名を知らなかつた。そこへ思ひがけなく杜鵑の鳴くのが  
 聞えて来た。杜鵑は次第に夕づいて来た空や山や湖の静けさの  
 中に、今漸く嘴を開いたものであらう。實に久しぶりに聞く思で  
 ある。とにかく心の中に奥深く巣くつてゐるこの聲が、久しぶり  
 にその音色を揚げるかのやうであつた。一聲、二聲と耳を傾けて  
 ゐるうちに、胸はおのづとそのときめきを強めて来た。鳴く。鳴く。  
 實によく鳴く。この鳥の癖で、鳴き始めたとなると、全く矢繼早に  
 鳴きたてるのである。

部屋には膳が運ばれた。山の上の空氣の意外の冷さには、初め  
 部屋にはひつた時から驚いてゐたのであるが、今は湖に面した  
 側の硝子戸を悉く明拂ひ、つい眼下にさゝなみのきらめきを眺  
 めて、二人は徐に箸を取つた。杜鵑の聲は湖とは反對の側の山の

なほ(尙)

上から落ちて來るのであつた。夕日の光が向岸の森の上に聳え  
 てゐる山の頂に消えてしまつても、なほ暫くは鳴き續けてゐた。  
 その山の中腹から上の草原は、まだ眞冬のまゝの枯れほうけた  
 色を残してゐるのであるが、その枯野の色と杜鵑の聲とが、妙に  
 寂しい調和をなすやうにも思はれて、圓味を帯びた頂上の暮れ  
 て行くのが惜しまれた。わざとつけずに置いた電燈の光が部屋  
 を照らしても、なほ暫くこの鳥は鳴き續けてゐた。

氣持よく食事した後、幾時間か眠つて、やがてからりとしたす  
 がすがしい心地で目を覺ました。仰向のまゝ身動もせず、目を  
 開けた瞬間に、ほつたんかかけたか。ほつたんかかけたか。か  
 けたか。と鳴く例の聲が耳にはひつた。おやと思ひながら、なほ靜  
 かに待つてゐると、つい軒近くでも鳴くやうに、しみんと聞



やはり(矢張)

きなされる。わづかに首を傾けて縁側の方を見ると、硝子戸がほんのりと明るい。さてよく眠つたものだ。枕許の時計を見るとやはり眞夜中で、ちやうど二時半であつた。すると月夜だ。さう思ひながら、私は躊躇なく夜具から出た。そして硝子戸からのぞくと、何といふ明るい静かな景色であらう。湖も山もしつとりと月の光を吸込んでゐるのである。

ひそか(密窃、竊)に  
潜——潜  
ほしいまゝ(縦、  
恣擅に

友はよく眠つてゐた。私はひそかに手拭を取つて、戸をあけて庭へ出た。濕つた水際の上に、自分の影が墨畫のやうに映つた。月はちやうど湖水の眞ん中の空にあつた。岸に並ぶ諸の山も森も、すべて一抹の影さへ帯びず、あらはにその光を浴びてゐるのであつた。この明るい世界のうちに、何所に潛んで鳴くのか、實に自由自在に、ほしいまゝにこの鳥は鳴き入つてゐるのである。

ひだ(巖)

私は岸にしゃがんで、手拭を水に浸した。そして、冷い音を立てながら丁寧に髪を洗ひ、顔を洗つた。水の揺らぎが遠く圓く、月のもとに影を亂して廣がつた。それを見てゐる間も、澄みとほつた例の聲は、聲から聲を追ふものやうに、明るい中に落ちて来るのであつた。  
夜が次第に明けそめた。月は何時か湖心を去つて、後の山の端近く移つてゐた。そして、今まではなかつた陰影が、山々のひだに生れてゐた。殊に湖に浸つた麓の方に、それが深かつた。  
どこからともなく、薄い靄が水の面に動きそめた。山の方にも、所々にそれが見え出した。瞬くうちに、どちらからとなくそれ等が落合つて、やがて湖も山も、すべて姿を眞つ白い中に消してしまつた。

(みなかみ紀行による)



芥川龍之介

小説家、東京市に生れた。昭和二年歿、年三十六。

蓮の花  
ござ(御座い)



蜘蛛の絲

芥川龍之介

ある日の事でございます、お釋迦様は極樂の蓮池のふちを、一人ぶら／＼お歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうに眞つ白で、その眞ん中にある金色の藥しよからは、何とも言へない好い匂が絶間なくあたりへ溢れてをりました。

極樂はちやうど朝でございました。

やがて、お釋迦様はその池のふちにお佇みになつて、水の面を蔽うてゐる蓮の葉の間から、ふと下の様子を御覽になりました。この極樂の蓮池の下は、ちやうど地獄の底に當つてをります。

から、水晶のやうな水を透き通して、三途の河や針の山の景色が、まるで覗眼鏡を見るやうに、はつきり見えるのでございます。

すると、その地獄の底に犍陀多といふ男が一人、外の罪人と一緒にうごめてゐる姿がお眼にとまりました。

この犍陀多といふ男は、人を殺したり、家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございしますが、それでもたつた一つ、善い事をした覚えがございします。と申しますのは、ある時、この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えました。

そこで犍陀多は、さつそく足を舉げて踏殺さうとしましたが、「いや／＼これも小さいながら命のあるものに違ひない。その命を無暗にとるといふ事は、いくら何でもかはいさうだ」と、かう急

さつそく(早速)



とうとう(到頭)

絲——糸

に思ひ返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやりました。お釋迦様は地獄の様子を御覽になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのをお思ひ出しになりました。さうして、それだけの善い事をした報には、出来るなら、この男を地獄から救ひ出してやらうとお考へになりました。幸ひ側を御覽になりますと、翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹、美しい銀色の絲をかけてをりました。

お釋迦様はその蜘蛛の絲をそつとお手にお取りになりました。さうして、それを玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ眞つ直におおろしなさいました。

二

こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一緒に、浮いたり沈

んだりしてゐた犍陀多でございます。

何しろどちらを見ても眞つ暗で、たまにその暗闇からぼんやり浮上がつてゐるものがあると思ひますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございますから、その心細さと言つたらございませぬ。その上、あたりは墓の中のやうにしんと静まり返つてゐて、たまに聞えるものと言つては、たゞ罪人が吐く微かな溜息ばかりでございます。



(筆齊曉鍋河) 獄 地



これは、此所に落ちて来る程の人間は、もうさまじく地獄の責苦に疲れ果てて、泣聲を出す力さへなくなつてゐるのでございまして。

ですから、さすが大泥坊の韃陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかゝつた蛙のやうに、たゞもがいてばかりをりました。

ところが、ある時の事でございまして。何氣なく韃陀多が頭を擧げて血の池の空を眺めますと、そのひつそりとした闇の中を、遠い遠い天の上から、銀色の蜘蛛の絲が、まるで人目にかゝるのを恐れるやうに、一筋細く光りながら、するくくと自分の上へ垂れて来るではございせんか。

韃陀多はこれを見ると、思はず手を打つて喜びました。この絲

もが(腕)く

はず(管)

つか(掴)む

もと(素、固)より

萬——万

にすがりついて、何所までも登つて行けば、きつと地獄から脱け出せるのに相違ございせん。

いや、うまく行くと極樂へはひる事さへも出来ませう。さうすれば、針の山へ追上げられる事もなくなれば、血の池に沈められる事もあるはずはございせん。

かう思ひましたから、韃陀多はさつそくその蜘蛛の絲を兩手でしつかりつかみながら、一所懸命に上へくくと手繰り登り始めました。もとより大泥坊の事ですから、かういふ事には、昔から慣れきつてゐるのでございまして。

しかし、地獄と極樂との間は何萬里となく隔たつてゐるものですから、幾らあせつて見たところで、容易に上へは出られません。やゝ暫く登るうちに、とうとう韃陀多もくたびれて、もう一手



かひ甲斐

繰りも上の方へは手繰れなくなつてしまひました。そこでし方がございませんから、まづ一休み休むつもりで、絲の中途にぶら下がりながら、遙かに目の下を見おろしました。すると、一所懸命に登つて來たかひがあつて、さつきまで自分がゐた血の池は、今ではもう何時の間にか闇の底に隠れてをりました。それから、あのぼんやり光つてゐた恐い針の山も、足の下になつてしまひました。

この分で登つて行けば、地獄から脱出すのも、存外わけがないかも知れません。

犍陀多は兩手を蜘蛛の絲にからみながら、此所へ來てから、何年にも出したことのない聲で、「しめた〜」と笑ひました。

ところが、ふと氣が附きますと、蜘蛛の絲の下の方には、數限り

から(絶む)

もない罪人達が、自分の登つた後をつけて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へ〜と一心に攀登つて來るではございませんか。

犍陀多はこれを見ると、驚いたのと恐いので、暫くはたゞばかのやうに大きな口を開いたまゝ、眼ばかり動かしてをりました。

自分一人でさへ斷れさうなこの細い蜘蛛の絲が、どうしてあれだけの人數の重みに堪へる事が出來ませう。もし萬一、途中で斷れたと致しましたら、せつかく此所まで登つて來たこの肝心な自分までも、元の地獄へ逆落しに落されてしまはなければなりません。そんな事があつたら大變でございます。が、さういふうちにも、罪人達は、何百となく何千となく、眞つ黒

ばか(馬鹿)

せつかく(折角)



な血の池の底から、うよ／＼と這上がつて、細く光つてゐる蜘蛛の絲を、一列になりながら、せつせと登つて参ります。今のうちにどうかしなければ、絲は眞ん中から二つに斷れて、落ちてしまふに違ひありません。



芥川 龍之介  
「こら罪人ども、この蜘蛛の絲はおれの物の許を受けて登つて

おれ(俺)

わめ(喚く)

来た。おりろ／＼。とわめきました。その途端でございます。今まで何ともなかつた蜘蛛の絲が、急

に犍陀多のぶらさがつてゐる所から、ぶつりと音を立てて斷れました。ですから犍陀多もたまりません。あつといふ間もなく、風を切つて獨樂のやうにくる／＼廻りながら、見る／＼うちに、闇の底へ眞つ逆さまに落ちてしまひました。

後にはたゞ極樂の蜘蛛の絲が、きら／＼と細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れてゐるばかりでございます。

三

お釋迦様は極樂の蓮池のふちに立つて、この一部始終をじつと見ていらつしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうなお顔をなさりながら、又ぶら／＼とお歩きになり始めました。

自分ばかり地獄から脱け出さうとする犍陀多の無慈悲な心



が、その心相當な罰を受けて、元の地獄へ落ちてしまつたのが、お釋迦様のお目から見ると、あさましく思し召されたのでございませう。

しかし、極樂の蓮池の蓮は、少しもそんなことに頓著致しません。その玉のやうな白い花は、お釋迦様のおみ足のまはりにゆらゆらと萼を動かしてをります。そのたんびに、眞ん中にある金色の藥からは、何とも言へない好い匂が絶間なくあたりへ溢れ出ます。

極樂はもうお晝に近くなりました。

(夜來の花による)

昭憲皇太后御詠

むらぎものころにとひてはちざらばよの人ごとは  
いかにありとも

三浦修吾

教育家。福岡縣に生れた。大正九年歿年四十五。

一一 感謝の生活

三浦修吾

京都のある友人から聞いた、秋田の山の中の百姓爺さんの話である。その友人が爺さんに向つて、お爺さん、お前死んだら何になる。と聞いた。死んだら土になるのだ。爺さんはかう答へた。爺さんの答はきつぱりとしてゐた。當り前だよ、わかつてゐるではないか。といふやうな調子を帯びてゐた。友人はこれに對して、何とも言ふことが出来なかつた。あの爺さんにはほんとに何時も參らせられるのです。と、友人は私に言つた。

この爺さんの言葉が、私には實に味はひ深く聞かれる。死んだら土になるのだ。この素朴な力強い一語に、爺さんの信念と希望と安心とが鳴り響いてゐるやうに聞かれる。爺さんは、この一語

素朴——素樸



つら(辛)い

より以上には何も言ひ得ないのであらう。けれども、爺さんのこの一語には、言ひ盡せぬ程の深い意味があると私は感じてゐる。試みに考へてみよう。私どもの口から、死んだら土になるのだ。といふ聲が出たとしたら、それはどんなに情ない絶望的な響であるだらう。この世は短い。この世では自分の望は遂げられない。この世はつらい事ばかりである。たま／＼面白い事があるにしても、それはちよつとの間である。名を成したところで、事功を擧げたところで、自分はやがて死なねばならない。死んだらどうなる。土になるばかりだ。あの冷い土に、かうした心持の外には、この言葉を發し得ないであらう。

然るに、この爺さんの聲は、死ねば極樂に往生する。天國に復活して、神と共に限りない幸福の生活にはひることが出来る。其所

挿圖  
水戸市の縣廳  
舍構内にある。



農人の形銅像

にはもう悲しみはないのだ。苦しきもないのだ。と信じて、未來の生活を希望して、安心してゐる。信仰の人の言葉に等しい。否、それ以上、どこことなく底力のある強い信念が籠つてゐる。

私は、秋田の山の中の百姓爺さんの心中にたどり入つて考へてみた。死んだら土になるのだ。この一語に、爺さんは胸一杯、腹一杯の喜を籠めてゐるやうに私には感

じられる。爺さんは小さい時から百姓をして、土に親しんで來たのである。四十年も五十年も、毎日々々土に親しみ、土に接觸して

接 觸 し て  
おれ



来た爺さんにとつて、土は死物ではない。無機物ではない。爺さんの眼には、土は生きて見える。爺さんの爲には、土は長い間の友達であり、兄弟であり、親である。否、否、土は爺さんの爲には神である。土といふ神である。

爺さんは、毎朝早く起きて、跣足で地上に立つ。土が足の裏に觸れる。じり／＼と土の氣が足の裏から爺さんの血管に傳はつて行く。爺さんの身體が温かくなる。爺さんの腹が満ち、胸が開け、頭が爽やかになり、爺さんの顔が輝いて來、爺さんの腕に力がうなつて來る。爺さんはくはを持つて、畑の土の中に足を入れる。土は爺さんのくはに隨つて、爺さんの心のまゝに動く、ころがる、くつがへる。

爺さんの胸中には感謝の念が湧いて來る。あゝ有難い事だ。か

うな唸る  
くは(鋏)



芋

うして芋種を植ゑ、大根の種を蒔いて置くと、雨が降つては土を濕してくれる。日光が照つては暖まりを與へてくれる。そして、芋の子が繁殖するのだ。大根が大きくなるのだ。かうして麥も出來るのだ。自分がかうして土の中に立つて、くはを執つて耕してやり、肥料をかけてやると、土が喜んでそれを吸取つてくれて、そして、芋や、大根や、米や、麥を育ててくれるのだ。自分達はその芋や、大根や、米や、麥を食べて、かうして生きてゐる事が出來るのだ。あゝ、人間は皆土のお蔭で生きてゐるのだ。土がなかつたら、自分達人間は死んでしまはなければならぬのだ。

さうだ、林檎が見事に實のつた。あのぼうつと夜明方の空の色のやうな、あの赤い黄色い色。何といふ美しい色であらう。そして、あの甘いやうな、酸っぱいやうな味。人間の手であんな結構な味



濕 朝 雨 路

恐多―畏多

が出来ると思ふか。都の人がどんなに骨を折り、工夫をして、旨い菓子や料理をこしらへるからと言つても、あの林檎の味にまさる物をこしらへる事が出来るものか。日本一、いや、世界一の料理の名人だつて、林檎の味程の物をこしらへる事が出来るものか。それは、みんな土が育て上げてくれるのだ。自分は一生土の相手になつて、土の仕事を手傳つて來たのだ。その報酬に、土が自分にこの旨い物を食はしてくれるのだ。自分は山の中の貧乏者でも、土のお蔭で、土の助勢をしたお蔭で、都の金持と同じやうに旨い物を口にする事が出来るのだ。いや、恐多い事だが、天子様と御同様、この旨い物を口にする事が出来るのだ。有難いことだ。

爺さんはくはの手をとめて、腰を伸ばしながらあたりを見廻すと、朝の露に濕つた土が朝日の光を受けて、きら／＼と輝いて

ますく益

ゐる。爺さんの胸にはますく、感謝と報恩との念が湧く。爺さんは天地の恩恵の輝の中に立つてゐるのだ。

この一生を、くはを執つて土の中に立つて過ごして來た。長い事であつた。自分ももうやがて死ぬのだ。死んだら何になる。土になるのだ。大根や、芋や、米や、麥や、林檎を育てるのだ。そして、子孫や世間の人達を養ふのだ。この皺くちやに干からびた自分の五體が、死ねばあの土になつて、五穀、蔬菜を育て上げるのだ。そして、人の命の糧をこしらへてやるのだ。土になれたら子孫も養へる。天道様に御恩返しも出来るのだ。

「死んだら何になる。」

「知れてゐるではないか。あの土になるのだよ。あの有難い土様、土といふ神様になるのだよ。」

(林檎の味による)



下田次郎

教育家、文學博士、廣島縣に生れた。昭和十三年歿、年六十七。

一三 快活

下田次郎

人の一生には幸運な時もあるれば、また不運な時もある。不運だからといって泣いてゐたところで、運の神が氣の毒がつてくれるものでもなく、また笑つてゐたところで、別に税のかゝるものでもないから、なるべく常に笑つて暮らすやうに心掛けたいものである。世の中には、何不自由なく暮らして、他人から羨まれるはずの身でありながら、何時も苦蟲をかみつぶしたやうな顔附をしてゐる人がある。こんな人に、何が氣に入らぬのか。と聞いてみると、人の笑ふのが氣に入らぬ。と言ふ。それならば、自分も笑つてゐればよささうなものなのに、まことに損な性質の人もあればあるものである。これに反して、何時出合つても、にこ／＼と嬉

羨——羨  
か(嚙)む

しさうな顔附をしてゐる人がある。こんな人は、本人が愉快であるのは勿論のこと、こちらまでも氣分がよく、恰も福の神が舞ひこんだかのやうに嬉しく感ぜられる。何も他人に金品を恵むばかりが、慈善ではない。愉快な顔を見せて、向ふの人までも愉快にするのは、これまた大きな慈善であらう。草木も日光に當てねば花は咲かぬが、人生も快活といふ日光に照らされて、始めて圓滿に花咲き實のるのである。

昔、ニューヨークに「笑醫者」といふ名を取つた醫師があり、彼は患者に接する時、いかにも幸福さうな顔附で、にこ／＼してゐるので、どんな患者でも、この醫師の顔さへ見れば、思はず知らず笑顔に引きこまれ、病氣ももう治つたやうな氣になつてしまひ、薬よりも、この笑顔の方がよく利いたといふ話がある。



フランクリン  
 アメリカ合衆  
 國の政治家、科  
 學者。西紀一七  
 〇六—一七九  
 〇

嘗——嘗  
 たゞ(唯、只)

またフランクリンの家の近くに、一人の職工が住んでゐたが、彼は何時も愉快さうな顔をして、誰とも深切な言葉を交はし、雨の日も風の日も嘗て變つた事はなかつたので、フランクリンは不思議に思つて、ある朝その男に出合つた時、君は何時も上機嫌だが、そんなにしてゐられるには何か秘訣でもあるのか」と問うてみた。

するとその男は、別に秘訣といふものもありませんが、たゞ私には快活な心をもつた妻があつて、毎朝私が仕事に出掛ける前には、笑顔で激励の言葉を與へてくれ、また夕方歸つて來た時にも、何時も笑顔で迎へて、心から一日の勞を慰めてくれます。だから私は、何時も心が晴れやかで、人に向つていやな顔をしたり、不快な言葉を出さうとしても出來ないので、と答へたといふ事

既——既  
 かに(蟹)



衛——衛

である。

快活でない人は、例へばバネのない車に乗つて、石ころ路を行くやうなもので、いろ／＼な事が始終頭に響いて堪へられまい。既に十分の心配を控へてゐながら、なほ心配を搜して歩いてゐるのかと思はれるやうな人、かにかにのやうに絶えず不平の泡を吹いてゐる人、怒つた螳螂のやうに年中青筋を立ててゐる人、こんな人の氣持ほど笑止なものがあらうか。

仕事をする事も忘れ、餘計な心配ばかりして日を過ごしてゐる人は、終に大成する事は出來ない。まして笑は、胸廓と横隔膜とを運動せしめて肺の活動を盛んにし、呼吸を増し、血行をよくするので、衛生上から言つても甚だ有益である。



西洋の諺にも「笑へば肥える」といふのがあり、我が國にも「笑ふ門には福来る」といふ諺がある。

くよくよ思つてみたところでどうにもならぬ事を知り、そして、この世界は快活な人の所有である事を知つたならば、私達はいかなる場合にも、屈託のない快活な心を持ち、陽氣に笑つて暮らすやうにしたいものである。

日は誰の顔にも照り、花は何人の目をも楽しませるではない

か。

廣々とした大空のやうな心を

明治天皇御製

自分達ももちたい

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心と  
ものがな

水谷まさる

詩人、小説家。名は勝。明治二十七年(二五五四)東京市に生れた。

一四 首ふり人形 (童謡)

首ふり人形

水谷まさる

坊やがゆびで

うごかすと、

首ふり人形

首をふる。

こつくり、こつくり、

こつくりこ。

首ふり人形



まね(真似る)

首ふると、

坊やもまねして

首をふる。

こつくり、こつくり、

こつくりこ。

坊やがまねして

首ふると、

三毛もいつしよに、

首をふる。

こつくり、こつくり、

こつくりこ。

かくれんぼ

若山牧水

まアだゝよ

まアだゝよ。

石の蔭にはとかげがあるし、

しひの木蔭は蜘蛛の巣だらけ。

しひ(稚)



とかげ(蜥蜴)

もういゝか、

もういゝか。



門の横には車があるし、  
堀のこちらは花ばたけ。

もういゝか、  
もういゝか。

まアだゝよ、  
まアだゝよ。

吉村冬彦

理學博士。本姓名は寺田寅彦。高知市に生れた。昭和十年歿。年五十八。

茂一繁  
畫顔



かうもり(蝙蝠)



一五 畫 顔

吉村冬彦

幾つくらゐの時であつたか確かには覚えぬが、自分が小さい時の事である。宅の前を流れてゐる濁つた堀川に沿うて、六十メートルくらゐ上ると、川は左に折れて、舊城の堀の茂みに分け入る。その城に向うた此方の岸に、広い空地あきがあつた。維新前には藩の調練場であつたのが、その頃は縣廳あきの所屬になつたまゝで、荒地になつてゐた。一面の砂地に雑草が所斑ところまたりに生ひ茂り、所々に畫顔が咲いてゐた。

近邊の子供は此所を好い遊場所にして、堀ほりの破れ破れから出入してゐたが、咎める者もなかつた。夏の夕方はめいゝに長い竹竿を肩にして空地へ出掛ける。何所からともなく澤山のかうもり



大

が蚊を食ひに出て、空を低く飛び交はすのを、竹竿を振うては叩き落すのである。風のない煙つたやうな宵闇に、かうもりを呼ぶ聲が對岸の石垣に反響して、暗い川上に消えて行く。かうもり來い。水吞ましょ。そつちの水苦いぞ」と、あちらこちらに聲がして、時竹竿の空を切る力ない音がひゆうと鳴る。賑やかなやうで言ひ知らぬ淋しさが籠つてゐる。

遅——遅

鎖——鎖  
ねぐら(時)

かうもりの出盛るのは宵の口で、遅くなるに随つて一つ減り、二つ減り、何所ともなく消えるやうにゐなくなつてしまふ。すると、子供等も散りくゞに歸つて行く。後はしんとして死んだやうな空氣が廣場を鎖してしまふのである。何時だつたか、ねぐらに迷うたかうもりを追うて、荒地の隅まで行つたが、ふと氣が附いて見ると、あたりには誰もゐぬ。仲間も歸つたか聲もせぬ。川向ふ

えのき(種)



水と上このてん  
水あ

を見ると、城の石垣の上に鬱然と茂つたえのきが、闇の空に物恐しく擴がつて、汀の茂みは眞つ黒に眠つてゐる。足を揚げると、草の露がひやりとする。名狀の出來ぬ暗い恐しい感じに襲はれて、夢中に駈出して歸つて來た事もあつた。

廣場の片隅に、高く小砂を盛上げた土手のやうなものがあつた。自分等はこれを天文臺と名付けてゐたが、實は昔の射的場の弾避けの跡であつたので、時々砂の中から長い鉛弾を掘り出す事があつた。年上の子供はこの砂山に攀登つては、滑り落ちる。時戦争ごつこもやつた。賊軍が天文臺の上に軍旗を守つてゐると、官軍が攻登る。自分もこの軍勢の中に加はるのであつたが、どうしてもこの砂山の頂にまで登る事が出来なかつた。何時もよく自分をいぢめた年上の者等は、苦もなく駈上がつて、上から弱



蟲と嘲る。早く登つて来い。此所から東京が見えるよ、などと言つて笑つた。口惜しいので懸命に登りかけると、砂は足元から崩れ、力草と頼む晝顔は脆くちぎれて、滑り落ちる。砂山の上から賊軍が手を打つて笑つた。どうしても登りたいといふ一念は幼い胸に村 巢くうた。ある時は夢にこの天文 冬 臺に登りかけて、どうしても登れず、もがいて泣き、母に起され、蒲團の上に坐つてもまだ泣いてゐた



事さへあつた。  
「お前はまだ小さいから登れないが、今に大きくなつたら、登れますよ。」

と、母が慰めてくれた。

その後、自分の一家は故郷を離れて都へ出た。執著のない子供心には、故郷のことは次第に消えて、晝顔の咲く天文臺もたゞ夢のやうな影を留めるばかりであつた。二十年後の今日、故郷へ歸つて見ると、この廣場には町の小學校が立派に建つてゐる。大きくなつたら登れると思つた天文臺の砂山は取崩されて、もう影もない。たゞ昔のまゝを留めて懐かしいのは、放課後の庭に遊んでゐる子供等の勇ましさと、柵の根元に枯れくゞに咲いた晝顔の花とばかりである。

(戴柑子集による)

寅日子  
寺田寅彦の俳  
號。

稟屋根に雞鳴く柿の落葉かな  
遠火花開いて消えし元の闇

吉村寅日子  
同



荻原井泉水

俳人。名は藤吉  
明治十七年(二  
五四四)東京市  
に生れた。

一六 清水

荻原井泉水

岩の窪みに湛へられてゐる清水、其所には象牙細工のやうな、  
白い美しいかきが遊んでゐたりする。木の根からにじみ出る清  
水、其所には草の葉が水滴の爲に、休むことなくかぶりを振つて  
ゐたりする。

富士の裾野を旅した時、行けどもく、青い草原に、きりくす  
が淋しさうに鳴いてゐるばかり、暑い日がじんくくと照り渡つ  
て、日陰を作る木立さへもない。人にも逢はない。鳥も鳴かない。さ  
うした路に疲れきつた時、ふと學生らしい旅人に逢つた。清水の  
ある所はありませんか。と、私がかう言つた言葉と、人穴村までど  
のくらゐありますか。と、向ふで問ひかけた言葉とが、同時にぶつ

きりくす(蝻  
嘶)



人穴村

静岡縣富士郡  
上井出村大字  
人穴。

かつた。そこら見渡す限りの平野で、大きな牧場にでもと思はれ  
るが、水といふものが絶えてない爲に、生物を飼ふ事が出来ない  
のであつた。清水のない所  
には生命がない。私達が汗  
を流しながら旅をしてゐ  
る時、生命の泉を求め、や  
うな氣持で清水を尋ねる  
ことがある。

夏の野の旅をしたこと



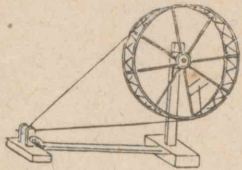
(筆溪杉田安) 水 清 岩

のある人、又は山に登つたことのある人で、清水の味を知らない  
人はあるまい。暫く経つてから、その旅の事を想ひ起して見ると、  
清水のあつたあたりの事が一番鮮かな印象に残つてゐるもの



えぐ(剝)抉る

絲車



である。人里を離れてゐる所でも、路傍に清水があれば、大抵一軒の人家があるものだ。大きな木をえぐつた槽から、惜しげもなくさらさらと**とぼれる**水が、不斷に生じて不斷に流れ去る。時といふものを思はせ、静かな障子を開いた家には、老婆が一人、絲車をわくわく廻しながら、毎日々同じやうな時を繰つて飽かないのである。其所を通る旅の者は、軒先の清水を所望しながら、其所に住む人も何か言葉を交さないではゐられない。又は深い山の中で、人家などは勿論なく、人の通る事も稀であるらしい所でも、ふと見出された路傍の清水に立寄つて見ると、誰か辨當を使つたらしい飯粒がこぼれてゐたり、**手すさび**に摘んで來たらしい花が挿してあつたりする。何時か此所を通つた人が、此所で休んで行つたのかと思ふと、同じ路を先へ行く者、後から行く者の懐か

しさも感じられる。

清水といふものは、實に幽邃な境を思はせるものだが、それでゐて、また不思議に**人間生活の親愛を感じさせるものである。**

昔、西行が吉野山に隠れて、柴の庵を結んだ時も、彼はなるべく人里から遠い所を選ぶと共に、又清水の滴る所を選ばねばならなかつた。

とくくとおつる谷間の苔清水

汲みほすほどもなき住居かな

と詠んで、彼はこの清水を以て命を支へてゐた。それから五百年の後、芭蕉が其所を訪ねて來た時には、西行の庵は朽ちてゐたが、その清水は苔にも隠されずにあつた。かのとくくの清水は昔にかはらずと見えて、今もとくくとしづく落ちけると、彼は感

西行

鎌倉時代の歌

僧。建久元年一

八五〇寂年七

十三。

芭蕉

江戸時代の俳

人。松尾氏。伊賀

の人。元祿七年

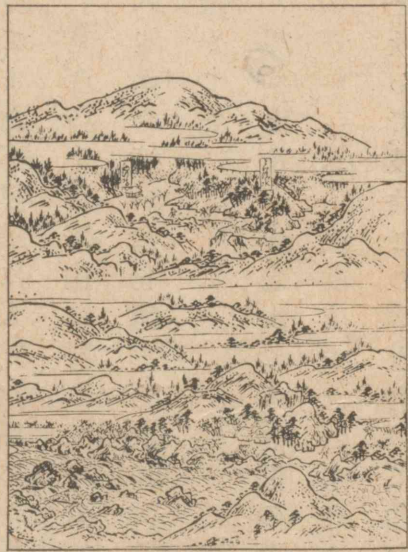
(二三五四歿年

五十一。



ほんたう(本當)

激の心を記してゐる。芭蕉は西行の歩んだ人生を慕つて、自分も亦その道を歩かうとしてゐた。その道は極めて幽かな、ほんたうの隠者のみが行く、岨しい道である。しかも、先人の足跡は、時の力を以て湮滅せられる事がないといふ眞實を、芭蕉はこの清水の昔に變らず湧いて滴つてゐる事を以て實證し得たのであつた。



(大和名所圖會所載) 清水のくくと

下野國蘆野といふ所に清水流るゝの柳といふの

蘆野  
栃木縣那須郡  
蘆野町。

證——証

がある。私が持つてゐる昔の旅行案内には、柳の下に水が流れてゐる小さい圖がはひつてゐる。西行が此所に來た時であらうか、

道のべに清水ながるゝ柳かけ

しばしとてこそ立ちどまりつれ

と詠んだといふ。芭蕉はその傳説を聞いて、懐かしくは思つてゐたが、奥の細道の旅の時に其所を通りかゝつて、

「こゝの郡守戸部某のこの柳見せばやなど、をりくゝにのたまひ聞え給ふを、いづくの程にやと思ひしを、今日この柳のかけにこそ立寄り侍りつれ。」

と、彼はその喜を筆にしてゐる。

西行も芭蕉も一生を旅に過ごした人々である。彼等は自分の先に行つた人がいかに行路に苦しみ、そして、いかにこの清水のほとりで喜を見出したかを、實によく知つてゐたに違ひない。

奥の細道の旅  
元祿二年奥羽  
北陸を旅行した。



幣原坦

歴史家、文學博士。前臺北帝國大學總長。明治三年(二五三〇)大阪府に生れた。

桃園驛

縦貫鐵道の停車場。基隆から五六軒。

一七 感慨多き角板山 幣原坦

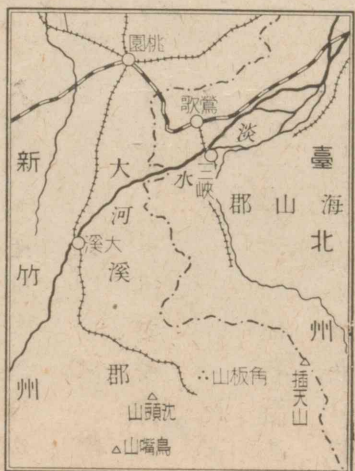
角板山は臺灣の新竹州大溪郡にある高い臺地で、連山幽谷の間に横たはつてゐる。海拔四百三十七メートル、面積約六ヘクタールある。高臺から見おろすと、眼も眩するばかりの深い谷が繞つてゐるが、その東北の谷間を縫つて、一條の青い水の流れてゐるのが即ち淡水溪の源流である。

汽車を桃園驛に捨ててから、大溪郡衙の所在地までの十六キロメートルは、自動車でも行く事が出来るが、大溪から角板山までの二十二キロメートルは登り道であるから、臺車に頼らなければならぬ。しかし、その臺車は行歩が緩慢で、山景を賞するに適當する事もあれば、疾驅狂奔して往々危険を伴ひ、變幻出沒、殆ど

端倪することの出来ない事もある。特に自分等が登つた日は、濃霧が濛々として幽溪を封じ、山腹に迫り、更に一層の壯觀を加へた。登り／＼して、ふと山の角を廻つたと思ふと、霧が俄に晴れはじめ、幽邃でかつ大きな谷の向側には、既に角板山が浮き出てゐたのであつた。

臺車は角板山の貴賓館の前で止つた。貴賓館は堂々たる總檜造の大厦で、高臺の東北隅に聳え、それと相對する峯巒の直下には、藍のやうな淡水溪の流が俯瞰されるが、その美觀は、優に日本十景の一にも算へ得られるであらう。

大正天皇がまだ皇太子にましました時、臺灣に行啓あそばさ





甘露寺侍従  
名は受長ヲサ  
ナガ伯等。



角板山

れるといふので、時の總督は角板山へもお迎へ申し上げようと  
して、この貴賓館の建築を思ひ立つた  
が、行啓の御中止となつた後にも、建築  
だけは遂行する事になつて、大正三年  
五月落成した。  
それが大正十二年になつて、實際の  
御用に立つた。即ちこの年の四月、時の  
皇太子殿下(今上陛下)が臺灣に行啓あ  
そばされた時、甘露寺侍従を角板山に  
お遣しになつたばかりでなく、大正十  
四年五月に、秩父宮殿下が御外遊の途  
すがら、また臺灣にお立寄りになつた時には、御自身此所にお出

憩—憩

でになつた。殿下の御轎をお擔ぎ申し上げた本島人が、御轎を貴  
賓館の玄關におろした時、殿下  
が「有難う」と御會釋を賜はつた  
といつて、非常に感激して人に  
語り傳へた事は、この邊の人々  
に大きな印象を與へた。大溪と  
角板山との中間にある牛角楠  
といふ勝地にも、殿下が御休憩  
になつたので、更に此所に記念  
堂と展望臺とを設ける計畫が  
ある。

かやうに、今日は名を九重の雲居の上にまで揚げてゐる角板



轎



繼

明治四十年  
二五六七年

山も、その昔を尋ねると、随分もの凄い話があつたのである。この高臺は、もと四方は雑木林に蔽はれ、その林野の間に蕃屋が點々と散在してゐた。さうして、此所の蕃人は臺灣の七蕃中で最も獯猛なタイヤル族の一つで、なか／＼頑強に我が警察官に抵抗したから、長期にわたつて戦闘が繼續されたのである。

明治四十年の五月であつた。桃園廳及び深坑廳の警部以下一千九百人の前進隊は、角板山の西に峙つ枕頭山を占領しようとしてた。何となれば、枕頭山は海拔六百三十三メートルで、此所に蕃人が據つてゐる間は、角板山の高臺は俎上の魚であるからである。然るに、枕頭山は北蕃中に雄を稱するタイヤル族の根據地だけあつて、一朝一夕には陥落しない。戦闘が一月續き、二月續き、三月續いて、まだ陥落しなかつた。さうしてその間に、前進隊副長

桃園廳の警部早川源五郎氏以下百十七名の戦死者と、二百三十九名の負傷者とを生じた。行動開始の後百六日を経て始めて占領の目的を達し、角板山に隘勇監督所を置いた。隘勇とは今日のいはゆる警手であつて、本島人及び歸順した蕃人を採用して、警察官の補佐たらしめたものである。



隘 勇 線

タイヤル族はなか／＼負惜しみが強い。それから二箇月の後、土匪と共謀し

て恢復を企て約十二キロメートルにわたる隘勇線を奪還し、所在の警備員を虐殺した。角板山の監督所も甚だ危かつたが、所員



は死力を盡して賊を防ぎ、救援隊の到着で漸く虎口を脱した。それから蕃匪討伐隊が編成され、十二月になつて全く平定を見るに至つたのである。明治四十二年、この邊一帶の蕃族が全部歸順したので、その七月から角板山に蕃童教育所をさへ開く事となつた。私達はこゝに至つて、明治天皇の御製を謹誦せざるを得ないのである。

新高の山より奥にいつの日か

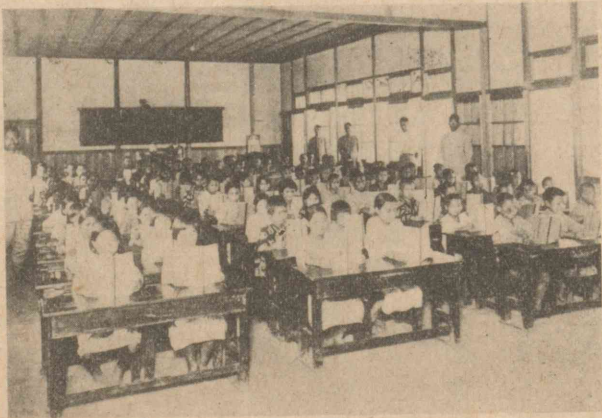
うつし植うべきわがをしへ草

蕃童教育所とは、蕃地に在勤する警察官が、生蕃の兒童を教育する所である。角板山の蕃童教育所が開始された時には、兒童の數はわづかに二十名であつたが、その後定員が増加されて四十名となつた。初はなか／＼入學しなかつたが、今では争つて來る

效——効

やうになつた。一視同仁の天恩を布く教育の效空しからず、大正十五年四月までの卒業者三十八名は、附近の蕃人の模範となつて、蕃界に非常な働をしてゐる。

私達がこの教育所を視察しに行つた日は、午前七時から兒童がうちそろつて、大正天皇御不例の御平癒を祈願する爲に、十二キロメートル向ふに設けられた遙拜所に赴く日であつた。そこで私達は、視察を遠慮しようかと思つたが、教育所からの申込みがあつて、午前六時に來てくれとの事であつたので赴い



角板山蕃童教育所

そろ揃ふ



もはや(最早)

だが、教師たる警官本野演暢氏は、それから七時まで快く児童の活動ぶりを見せられた。本野氏はもはや長い間、夫人と共に此所の教師をしてをられ、蕃人間に信望があり、児童は教育所ではこの夫妻を先生と呼んでゐるが、教育所以外では、父母と稱してゐるといふ事である。

自分は嘗て東海岸を巡視した際、蕃童の知能上に一種の缺陷のあるのを発見したのであつた。則ち、割切れない数の取扱ひに窮する事である。角板山あたりの児童はどうであらうかと思つて、三錢の郵便切手は十錢で何枚買ひ得るか。とか、二十人の児童に五十本の筆を分配するには、一人に何本づつ與へればよいか。とかいふ問題を出して、本野氏を煩はした。第一問はさつそく明答を得た。第二問は少々まごついたが、本野氏の巧妙な思想整理

缺—飲

によつて、これまた直ちに解決された。

それがすむと、本野氏の活潑な指導の下に、習字や圖畫が始まり、息づく暇もなく、児童は教壇に出てお話をしたが、いづれも手に入つたものである。虹の歌で發聲の上手なのに驚かされてゐると、その次はかの「水兵の母」で、聞く者を涙ぐましました。それに引續いて「一太郎やーい」をば、掛圖で説明しながら話したから、遂にハンカチーフを出さざるを得なかつた。その上、最後に秩父宮殿下のお話をする者が出て、

「殿下には、長くも我々の教室を御覽下さつたので、勿體ないと思つてゐると、殿下は更に本野先生に對して、子供は何時内服を着てゐますか。とか、御飯の副食物にはどんな物を與へますか。とか、ごく寒い時には、子供一名に毛布何枚を與へます



とゞろ(轟)く

か。とかいふやうな御深切な御尋があり、また、蕃人と呼びたくない。とさへ仰せられたと漏れ承りまして、有難さが身にしみました。」

と言ふに至つて、自分等の胸はとゞろく思がした。

もはや一同の出發する時刻である。辭し去らうとすると、本野氏から一言の挨拶を求められたので、さて立上がつたものの、胸のとゞろきはまだ止まない。そこで極めて簡単に、彼等平生の勉強を多とする旨を述べ、また、今日はこれから陛下の御平癒の祈願に行くといふのは、まことに結構な事で、諸君の熱心な祈願は、さぞや神様も聽いて下さるであらう。と言はうとして、陛下の一言が唇頭から漏れるや否や、兒童一同は立所に身を正して、氣を附けの姿勢を以て謹聽したので、自分の胸のとゞろきは更に一

唇——唇

郷——郷

層強大となつて、殆どものが言へなくなつた。かやうにして、蕃人は今や昔とうつて變つて、私達と同様、皇室を尊ぶ者となりつゝあるのである。

この教育所の卒業者の中には、なほ進んで臺北の醫學専門學校を出て、錦を著て郷に歸り、公醫を勤めてゐる人が二名まである。角板山に在勤する人は、その名も宇津木一郎といふ。對話その他の言動が内地人と寸分違はないので、自分ははじめ、蕃童教育所の出身である事を覺らなかつた。この公醫の診療所に看護婦として在勤してゐた宇津木スミ子、關野雪子の二女史もまたこの教育所出身で、日本赤十字社看護婦養成所修了者であつた。このやうな人々が、蕃人の生命の救済にまで手を著け、蕃界の教化に貢献しつゝあるのは、まことに喜ぶべき事である。

獻——獻



後野由衛  
支那事變に應  
召北支派遣軍  
に屬した。

一八 戦線より

一 慰問袋の禮狀

後野由衛

本日は懐かしい内地の皆様から、慰問袋を辱うし、欣喜雀躍して遙かに内地の銃後の皆様を伏拜み、萬歳を絶叫いたしました。暴戻な支那軍膺懲の命を奉じて、勇躍故國を發つて征途に就いてからこゝに十箇月。南に、西に、または北に、敵彈雨飛のその中を聖旗を奉じて幾戰闘いたしました。何分にも戦場の事とて、うち續く戰闘に疲れて憩ふ一刻にも、目にも一つの慰安もなく、壞れた民家の屋内でたゞ一つ待たれるもの、それは故郷からの便りと、銃後の皆様方から御贈り下さる數々の慰問品のみです。……その慰問袋を頂戴したの

憩  
—  
憩

まこと(誠)に

竝  
—  
並

ですから、その嬉しさは何に譬へる事が出来ませう。到底つたない筆紙に盡されません。まことに有難うございました。殊に私を最も慰めてくれる雑誌、唯一の好物とするチョコレート、幼い頃の子供心を想ひ出させるキャラメル、キャラメル一つ口にすりや、幼き頃にあこがれた、いくさごつこの突貫が、想ひ出されて懐かしや、それに又母がよく歌つてゐた懐かしい思ひ出、橋のたもとに町角に、並木の路に停車場に、千人針の人の數



さつそく(早速)

却

ますく(益)

心をこめて運ぶ針

お、御厚情溢れる、熱誠こもれる千人針、私はこの身離さずとさつそく身につけました。何とお禮申していゝでせう、感謝するのみでございます。

千人針を身につけた以上、銃後の貴方様の熱烈な御後援の精神を想ひ、夢の間にも忘却することなく、今後晝夜の別なくますく、勤務に勵む決心をります。そして十二分に活躍し、華と散る覺悟です。決して銃後の皆様方を欺くことはいたさない決心です。十分にやります。この際皇軍の譽を發揮し、東洋を平和に導かなければなりません。我々の苦勞を銃後の皆様に書き送る事は心苦しいことです。苦しみも、勞れもそれ等は皆我等の務です。覺悟の前です。今後とも何

森協康雄

支那事變に應召、特務兵として南支派遣軍に屬した。

りつば(立派)

とぞ宜しく願ひ申し上げます。亂筆ながら今日戴きました慰問文、及び慰問袋のお禮を遙かの陣中より厚く、御禮申し上げます。

(戦場と故郷による)

森協康雄

二 廣東だより

前便にも書いたと思ひますが、只今、廣東に駐屯中で、もうざつと一箇月位になります。廣東市中を大分歩きました。随分とりつばな都會ですね。永い間大阪に住んでゐる自分も驚くくらゐたいした街で、道路のりつばなこと、建物がそろつて大きいこと、とても東京、大阪の比ではありません。成程、東京、大阪にも大きな建物はありますが、廣東のやうにいづれも三、四階建の軒並のそろつた商店がずらりと並んでゐるといふことはなく、或は二階建の家あり、中には平家もある



角) とにかく(兎に

といふ工合で凸凹になつてゐます。廣東は違ひます。そのそろつた商店が赤、緑、黄等の極彩色で塗立ててあるのを、街の中央に立つて眺めると、繪のやうに美しく、非常に魅力があります。とにかく非常に商業の盛んな街だと思ひました。工業はその割合に貧弱です。工場らしい工場はあまり見當らず、恐らく製品は海外の輸入にまつてゐるのでせう。さうした理由から、將來日本との貿易は頗る有望のやうに思はれます。



廣東江岸通

鼓  
—  
鼓

廣東は南部を流れてゐる珠江によつて、その半分の命脈は保たれてゐるといつて差支へなく、この河畔を歩くと、大小の船が盛んに往來してゐます。今日軍用で南北を繋ぐ唯一の橋、海珠橋を渡つて西方の租界附近へ行きました。ちやうど小雨が降つてゐて、橋から川を見渡すと、河畔のビル街は雨に模糊として煙り、その霧の中を日本船が船尾に日章旗を翻しながら驀進してゐました。その瞬間、非常に力強いものが胸に湧上り、日本帝國に生れた有難さといふものを、しみみ味はひました。

岸にはジャンクが澤山碇泊してゐます。胴の間は太鼓のやうに圓くなつてをり、女の漕いでゐるのをよく見受け、中には七八歳の少女が舳で漕いでゐます。櫓は日本のとは違ひ、ボ



トのとよく似てゐます。大部分は渡船です。朝など野菜、卵、米を積んだ百姓等が、がや／＼と何かしやべつて、危かしい踏板を上下させつゝ波止場へ上つて行きます。いやその喧しいこと、廣東の一奇観で、僕は一時間も煙草を吸ひながら立ちつくして眺めた事もあります。

占領してからまだ間もないこととて、大部分の店は戸を閉ぢてをり、街路に人影も少く寂しいですが、一月前から比べると大分支那人が歸つて來ました。料理店はぼつ／＼營業を始めました。廣東料理は有名ですから、そのうち試食しようと思ひます。市場だけは殷賑を極め、あらゆる食物からバナ、蜜柑、バナ、イヤなどの果物まで賣つてゐます。狭苦しい石疊の上をやゝもすれば足を滑らせながら、支那うどん

を食べたり、玄米パンに似た饅頭に舌鼓を打つたりしましたが、近頃は慰問品がどん／＼來るので、足が遠のきました。とても汚く、喧噪を極め、支那の下町情調を味はふにはもつて來いの所です。

宿舎の近所の支那人の良民と心安くなりました。その老人は岩崎のお祖父さんにそっくりで、いかにも學者らしいところから、筆談で色々の事を聞くと、想像以上の學者で、日本の事情に詳しいのに驚きました。時々、菓子や残飯を持つて行くと大變に喜んで、お茶を出して歡待してくれます。久しぶりに觸れた柔かい家庭的雰囲気、漸く故國が懐かしく思はれました。戴いた紙風船を一つ、その家の小さい娘にやつたら「アリガタウ」と、かはいゝ聲で禮を言ひました。



この「アリガタウ」は、僕が先日教へてやつたのです。かうして僕は日支親善のため、少しでもつくさうと心掛けてゐます。支那の良民は日本のそれと少しも變らず、非常におとなしく親しみ易いものです。こゝへ來て驚いた事は、廣東人は日本人と顔が大變似てゐる事で、洋服を著たらどつちがどつちだか解らぬくらゐです。

時計を見るとはや十二時、明日の勤務もある事だし、今日はこれ位で失禮します。嚴寒に向ふをりから、どうぞ皆様お身體を御大切に。さやうなら。

(戦場と故郷による)

里見 弴

小説家。本姓名は山内英夫。明治二十一年二五四、八、横濱市に生れた。

長良川

源は飛驒と美濃の國境、岐阜市の西北を流れ、揖斐川に合する。鵜飼で名高い。さかのぼ(遡)るふくれ(脹)る

一九 鵜飼

里見 弴

鵜飼の見物船が長良川をさかのぼり始めると、かういふ行樂の長閑に楽しい心持にはふさはしくない程の風になつて來た。屋根船の四圍に張廻した幕が、帆のやうにむつくりとふくれ上がるかと思ふと、忽ち又ぼろ／＼、ぼろ／＼と烈しくはためく。その度に船の名を表はした大きな圓提燈が揺れ動いたり、灯をとられたりした。

そのうち、何時かあたりが賑やかになつてゐた。見物船はその邊までさかのぼると、思ひ／＼に河原にもやつて、遙か川上から流して來る鵜船を待合はせるのだつた。絃歌の聲は吹きちぎられたやうに、時々私達の船の中に飛込んで來た。發射光、金魚、水雷



艇——空にうち揚げられるのや、水の上を走るのがや、いろ／＼と名物の三河花火を揚げて見せた。あつちの船からも、こつちの河原からも、空や水の上に細かな黄色い火の粉が美しく散つた。紅や、青や、紫の玉がぼん／＼と流れるのもあつた。その度に叫聲があがつた。花火賣の船が、あとから／＼何艘も、やつて来た。

けれども、暗い夜の空に、風の翼はます／＼烈しく鳴つた。船頭は河原の小石を拾つて来て、提燈の底に入れて、あふられてもひどく揺れない算段をしたりした。

その時「あ、来た／＼」といふやうな聲で、急にあたりがざわめき始めた。人々が伸上がった。眺める川上へ目をやると、金華山の裾を巡つて、かぶり火にぼうつと空を明かるませながら、鵜船が近づいて来たのだつた。

金華山

岐阜市の東。稲葉山ともいふ。

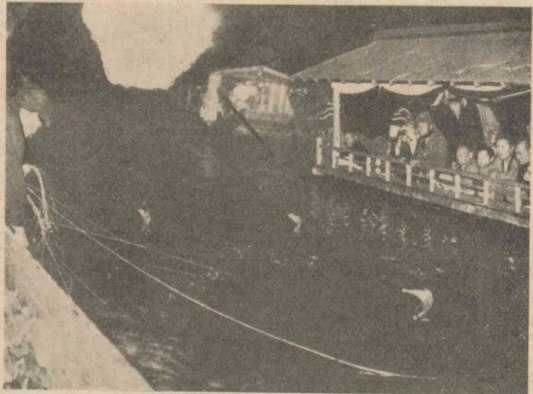
出来るだけ鵜船の近くに寄る爲に、近所にもやつてゐた屋根

船がそろ／＼動き出した。竿が水底の砂利にくひ込む。がり／＼といふやうな音が尻の下から、船底の板のすぐ下から聞える。

鵜

「さあ／＼、もう鵜船が来ましたよ」といふやうなことを、その時船頭が大聲にわめきたてた。船はすぐ漕ぎ出された。と、忽ちもう昔の海戦のやうな騒の渦の中にあつた。

飼



舷と舷は、のべつにどす／＼と相觸れた。何かわめき交はしながら、船頭達は長い竿を、ぬれてびか／＼光る長い竿を振



届——届

かゞり(簀)



鶺鴒



廻した。今まで別々な小座敷にゐた者が、急に入りごみの大廣間にでも出たやうに、美しく著飾つた男達や女達の席が、つい手の届きさうな隣に来て、船腹をこすり合はせながら押流されて行く。と思ふと、瞬間にもう隣の座敷の有様が違つてゐる。——何時の間にか別な船と並んでゐる。舷に手をかけちや危い、く。誰がなんと言つてゐるのか、あたりがたゞわけのわからない叫聲で充たされてゐる間に、そんなことを注意する言葉も聞えて来た。どすん／＼、船と船でもんでゐるうちに、幾度も鶺鴒船のそばに出たり、また隔てられたりした。鶺鴒船のそばでは、かゞり火でぼうつと頬が熱くなつた。紺頭巾や腰蓑のかひ／＼しいながら、古雅で優長なこしらへの鶺鴒匠は、恐しく緊張した面持で、手ぎはよく何本かの紐を掌のうちにさばきながら、時々鶺鴒を引寄せて、び

あゆ(鮎)



かびかと光る魚を籠の中に吐かせた。鶺鴒も大勢の見物をもつたことで興奮してゐるやうに見えた。拔群な手がらをたてようと、一所懸命になつてゐるやうに見えた。鶺鴒の一人はかゞり火に照らされた赤銅色の苦みばしつた顔を峻しくして、そばへ来てまご／＼してゐる見物船の船頭に、劍突をくはせたりした。……緊張と、喧騒と、興奮と、混雑と、——わけのわからない、わく／＼と忙しい夢でも見てゐるやうな氣持だつた。

鶺鴒は頸を伸ばして、黒い體を細くして、水の中を自由自在にあゆを追つてゐた。あたりの喧騒と、あの鋭い目と嘴とをもつた追及者の爲に、殆ど半狂亂の態で、盲めつぽふに逃廻る氣の弱さうなあの魚の心持も感じられた。船と船との間にじわ／＼と波がしらをあげる川瀬のあわたゞしさにも、幾分かその魚の氣持は



象徴せられてゐた。

程なく、——ある地點まで下つて、この川漁はすんだ。鶺鴒船が岸にもやはれると、又そのまはりは見物船で一杯になつた。務を果した鶺鴒は、めい／＼の保つてゐる位によつて、舳から順に一列に舷の上にとまつて、羽を擴げてゐた。さうして、羽を乾かすのだつた。大きな羽を擴げると、風を受けて體が前後に搖れた。やや傲慢な程に自信のありげな強氣らしい鶺鴒は、あちこちと見物人の顔を眺め廻して、横柄に空うそぶいてゐた。



(筆崖天淵仁和) 鶺鴒

(桐畑による)

うそぶ(囔)く

羽仁もと子

教育家自由學園々長。明治六年二五三三青森縣に生れた。

二〇 天然の教訓

羽仁もと子

私どもの鎌倉の假の住居は、海と小山とに近く、田と畑との中に町を離れて建ててあります。且に夕べに、清らかな天然の教訓に接する事の出来るのは、不便な生活に伴なふ大きな幸福の一つであります。

粟の穂は重く垂れ、稻もはや色附くばかりになりました。麥の切株がすき返されて、小さい種子が蒔かれ、鏡のやうな水の中に早苗が植ゑられてから、まだ幾日も経たないやうな氣がします。昨日も今日も同じであるとはばかり眺め暮らしてゐる間に、何時このやうに楽しい秋が見舞つて來たのでせう。思へば夢のやう



す(鋤)く



かな(叶)ふ

です。我が心の願が果して天の意にかなひ、我が日々の業がまた善い事であつたなら、一樣な神の恩恵は、また私達の知らないうちに自分達のする業の上に注がれてゐるのでせう。今日も明日も同じやうに見える我が心、我が身のまはりの状態も、收穫時を神に任せて、一心に漑みづぎ、くさぎる間に、時には困難があり、時には小さい失望があるにしても、遂にいろくくの喜ばしい實を結ぶやうになる事は、私どもの半生に於ても、たびくく経験した事です。

知らない間に米が實のり、粟が熟するさまを見て、正直に我が業にいそしむ者の幸福を思ひ、今更のやうに希望と感謝とに充たされるのでございます。

西瓜



ごまか(誤魔化)す

くらま(晦)す

智慧—智恵

きうりを植ゑて西瓜を穫るつもりだと言ふ人があつたら、何人もその愚を笑ひ、その邪よこしまな考を卑しむでせう。くさぎらないでくさぎつたやうな體裁を装ひ、くさぎつた者と同様の結果を得ようとする者があつたら、何人もその蟲のよいのに呆れるでせう。しかも、世の中にはよい心、偽のない實質、眞實な努力によらず、いろくくの他の方法、即ち巧に世を渡る事などによつて、眞の幸福を得ようとする人が澤山あります。それはきうりを植ゑて西瓜を穫らうとするのです。天然は欺かないけれども、人の世はごまかしのさく所だと思ふ人があつたら、それは間違ひでせう。人の目は或時の間くられます事が出来ず。さうして邪な心も、淺はかな智慧も、富の力も、時にまことの榮のやうに輝く事もありませう。しかし、人生も亦明らかに神の田畑であつて、個人と社會と



了解—領解

の罪惡によつて眞に良い實を結び、善良な努力によつて悪い實を結んだ例はないばかりでなく、善良な努力も、罪惡も、すべてそれぞれ力の大小によつて、いかに適切に報いられてゐるかは、獨り歴史が私どもに語るばかりでなく、思を潛めて狭い我等の見聞の中をたどつてみても、明らかに了解されることでございます。

「夏作は一日後れると半月の損」とこの邊の農家では申します。他よりも四五日早く植附けた一つの甘藷畑は、果して他に先立つて收穫を始めました。新たに市に出る野菜は、一日でも早いだけよい價をもつてゐるのです。さうして、次に蒔くべき菜や大根も、ゆつくりと天氣都合を見計らひ、最も適當な日に植附ける事



甘藷

が出来ました。さうして、收穫の後れた他の畑があわてて次の種子を蒔き、をり悪しくも照續きにあひ、風にあつて、辛うじて生ひ出た弱い芽とは殆ど同じものとは思はれないばかり、威勢のよい葉を茂らせてをります。

賢くて勤勉な農夫は、同じ一枚の畑でも人一倍に利用して、多くの良いものを作り出す事が出来ます。私どもおの／＼の才能もこれを養ひ、これを用ひる事が熱心で、抜目がなければないだけ、他の同じ程の才能を與へられた人よりも一層價值のある生涯を送ることが出来ます。私どもの心の畑は十分に開拓され、さうして、むだなしに利用されてゐるのでせうか。次から次と良い智慧を生み出すべき心の畑が、とかくうち棄てられがちになつてゐることは、實に大きな不幸不利益なことであります。甘藷の

むだ(無駄)



畑は、私どもに心の畑を出来るだけ利用せよと教へてくれました。

低い垣根に朝顔の花が咲き、小さい畑に茄子が瑠璃色の實を結びました。夕な〜に萎んだ花を摘み、伸過ぎる蔓の先、茂り過ぎた葉を去つて、力めて無用のものに幹をいたはらせないやうにしました。今もなほ朝々目覚めるばかり、數多く咲きほこつてゐます。茄子もみづ〜しく實のつてゐます。

〔羽仁もと子著作集による〕

昭憲皇太后御詠

人しれず思ふこゝろのよしあしも照らし分くらん天地のかみ

今井邦子

歌人。名はくにごえ。明治二十三年(二五五〇)長野縣に生れた。勝海舟  
幕臣。名は安芳。明治以後諸官に任じ伯爵を授けられた。明治三十二年(二五五九)歿。年七十七。

鬱陶

二一 非常時の用意

今井邦子

女學校に通つてゐる長女の國語讀本に目を通してゆくと、西郷隆盛の度量といふ題で、江戸城受渡しの際の、勝海舟と西郷隆盛との、豪膽にして至誠の籠つた談判の運びを記した一文が載せてあつた。その話が私をいたく感激させた。これは「氷川清話」といふ書物の中から抜いたものである事が記してあつたので、私は「氷川清話」といふ本を見たいものだといふ心を起した。それから心掛けてゐると、思ひもかけずそれは私の舅が愛讀した書とあつて、その古い文庫の中に藏されてゐる事を知り、さつそく取出して讀んでみると、なか〜面白い。お蔭で私は梅雨の鬱陶しい曇日の二日を、熱中して過ごすことが出来た。



天保の飢饉  
天保七年二四  
九六諸國飢饉  
翌年に及んだ。

この書は海舟先生の談話を選抜して纏めたもので、全文が談話風に書かれてある。言葉がぶつきらぼうで、所々多少いや味に思へる所もあるが、また實に面白く、且つ豊かに心に残るものがある。私はその中でも特に天保の飢饉の時の話を、いたく感心して讀んだのである。

天保の大飢饉の時、海舟は毎朝拂曉に起きて劍術の稽古に行く前に、徳利搗きといふ事をやつてゐる。これは徳利の中へ玄米五合ばかりを入れて、その口へはひる程に削つた檜の棒でこつこつと搗くのである。海舟はそれを毎朝手にまめの出来る程搗いて、これを篩でおろし、自ら炊いて父母に供してから稽古に出掛けた。私達は、大正十二年の大震災に玄米を食べなければならぬ時に當り、電気仕掛の精米所をのみあてにしてゐた日常生

上野廣小路  
東京市下谷區

溶―融―解  
曝―晒

活の不徹底を悟らせられ、水車の必要を新たに考へたものである。然し、この徳利搗きを知つてゐたら、私達は一層恐しい破壊の來た時の用に立ち、生活の覺悟も徹底すると思ふ。然し、これは亂時にあつて萬止むを得ぬ場合に限る。その不自由さは海舟その人ですら、徳利搗きには己も閉口した。といつてゐるから面白い。また當時、幕府では上野廣小路に救小屋を設けて、貧民を救出し、且つ淺草の米庫を開いて粃を貧民に頒けた事が書いてある。そして、その粃が最も古いものは六十年前の粃で、色が眞つ赤であつたとあるが、かういふ點をちゃんと見ておく。海舟はさすがであると感じた。それから赤土一升を水三升で溶いて、これを布の上に厚く敷き、天日に曝し、乾いてから生麩の粉などを入れて、團子を作り、また松樹の薄皮を剝いて、鯛のやうにして食物に



した事及びその土團子をあまり食ふと黄疸のやうな顔色になるが、食へば随分食ふ事の出来るものであつたと書いてある。

世界大戦の後期に於て、西歐の小さい獨立國フィンランドの私の友人ミスシーリといふ婦人は、その時政府が分配したパンを持つてゐて見せてくれた。それは森の苔と、松の鋸屑と、少量の小麥の粉とをまぜたもので、とても平日では口に入れることの出来るものではなかつた。フィンランドでは、一般にこれを常食とした時が二箇月以上續いたと話してくれた。私達は平日に慣れずぎて、さういふ食料を作る道も知らず、食べられる草さへもよくは知らないのである。氷川清話のこの土團子の作りやうを、私は自分の手帖の中へ、何時の役に立つといふ事を望まぬながらに、しかと書き止めておいた。

(茜草による)

二二 鳴く蟲の話

夏湯上がりの縁先に、冷風と共に夕闇が忍び寄り、静かに奏でる蟲の音は、暑熱と勞働との後で味はひ得る夏の夜のこの上ない慰安なぐさであり、喜悅きえつであります。

旅の宿りに、閑居しづかにすまひの邊に、一家を擧げての、だんらんだんらんの食卓に、打水をすませた庭の隅に、或はまた釣瓶垂れた井戸の傍に、並木の下に、我々は到る所に鳴く蟲の悲哀あはれに接し、歡喜よろこびに耳そばだて、清淨きんじやうさに心打たれるのです。

鳴く蟲の音。それは夏のものです。汗を流す晝間の續く限り、夜のものです。

夏の夜の、散歩そらろ歩きに、縁日の灯をくゞれば、きつと其所で市

だんらん(團戀)

そばだ(敬)て

市松格子









映つて、あらゆるものが皆美しく見える。この経験を経なければ、日本は到底わかるものではない。日本人の日常生活に現れる美と怪奇との不思議な融合、奇妙と可憐との魅力がわかるものではない。其所ではいろ／＼の面白いものに觸れるけれども、その中でも最も注目すべきものは、小さな木製の籠を澤山備へてゐて、幻燈のやうに光り輝いてゐる小屋掛である。その小屋掛は、歌ふ蟲を商ふ商人の小屋掛で、其所から鳴く蟲の優しい嵐が流れ出るのである。それは奇妙な観物で、外國人は殆ど何時もこれに引附けられる。といつたやうな意味の事を書いてゐます。

夜をこめて可憐な音楽を奏でるこれ等の鳴く蟲は、一體何時頃から、我々の祖先を慰めてゐたのでせうか。鳴く蟲に關する最初の記録は、平安時代の物語に現れてをります。その頃から、既に

翫—玩  
松蟲



鈴蟲



鳴く蟲は其所此所の野邊の草葉の宿に鳴いてゐました。高雅な性情と趣味とをもつた宮人達は、これを捕へて籠に入れたり、部屋の前庭に放つたりして、その音を賞翫してゐたのです。その蟲が何であつたかは明らかではありませんが、松蟲と鈴蟲とだけは知られてゐました。しかし、松蟲はりん／＼／＼と鳴き、鈴蟲はちんちろりんと歌ふものであるといふやうに、ちやうど今と正反對に考へられてゐたのです。更にまた、その當時の和歌を見ると、松蟲は鈴蟲に比して遙かに澤山詠みこまれてゐますが、これは松蟲のまつが、何々を待つまつにかゝるといつた言葉のあやから、大した考もなく、鈴蟲まで松蟲のやうに歌つたのだらうと思はれます。

（東京朝日新聞による）



芳賀矢一

國文學者。文學博士。福井市に生れた。昭和二年歿。年六十一。

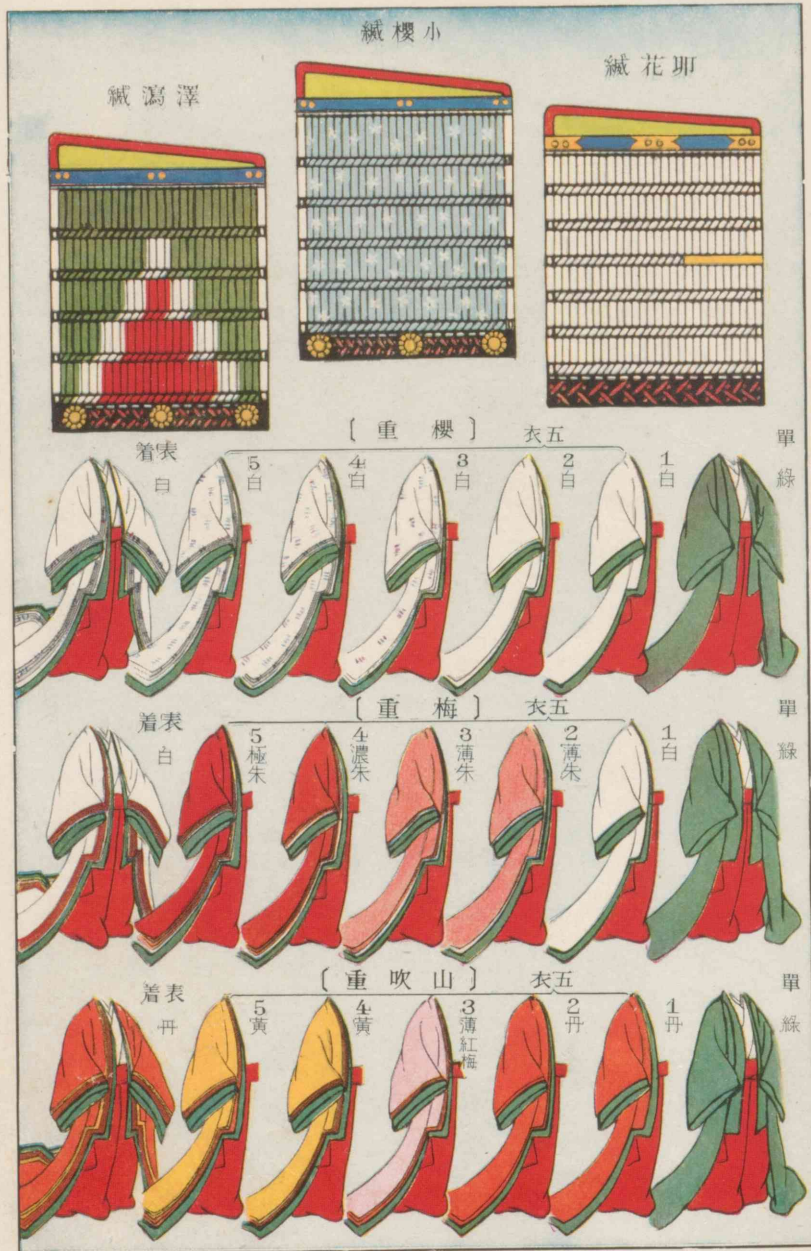
あこが(憧)れる

二三 美しき國民性

芳賀矢一

氣候は溫和である。山川は秀麗である。花紅葉、四季をりくくの風景はまことに美しい。かういふ國土の住民が現生活に執著するのには自然である。現世を愛し、人生生活を樂しむ國民が、天地山川を愛し、自然にあこがれるのも當然である。

日本の娘の著物の模様のはでやかなのは、西洋人の著書には何時も歎賞してあるが、日本の秋の野の景色を見れば、尙更これよりも綺麗である。自然に衣服にもこれが染まつて來る。昔のしのぶのすり衣、今の振袖模様、裾模様、つまりは同じ事である。菊や櫻や、梅や牡丹を大きく染め出した友禪縮緬や、襦珍の帯から下駄の鼻緒の先まで、自然界の草木花模様で飾られてある。その色









かしは(櫛、柏)

島臺

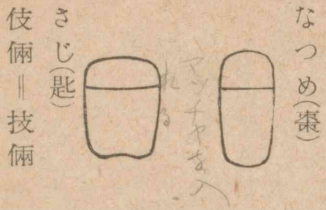


すし(鮭、鯉)  
南天



まじなひ(呪禁、厭勝、禁厭)

して、菓子屋の目録を一見して、一層その多い事がわかる。松風、紅梅、燒磯松、桃山などの一般名稱は言ふまでもなく、櫻餅、うぐひす餅、かしは餅の外、自然界の現象に取つたものでも、洲濱、時雨、越の雪、落雁、しほがま、さざれ石などの類がある。名稱ばかりではない、形も花木に取るのが多い。干菓子とは別して、松の葉や菊の花、すべて花木の形に作るのである。汁粉なども十二月に分けて、それぞれの雅名をつけてある所もある。また下戸の領分ばかりでなく、酒にも櫻正宗がある。菊正宗がある。山川の白酒がある。蓬萊の島臺は今も儀式の時に用ひられるが、魚類の料理もまた植物界、自然界の産物、離れぬ。刺身やすしには、笹の葉を敷く。牡丹餅や赤飯を配るのに、重箱に南天の葉を敷く。これは毒を消すとかいふまじなひから来たものでもあらうが、かしはでの名残もあらう。料理



の膳碗は金蒔繪で花木の形を裝飾とする。漆器、陶器一切の美術工藝品が草木花鳥の繪であることはもとより言ふまでもない。それは裝飾美術として、近世のヨーロッパの美術に少からぬ影響を與へたものである。茶の湯のなつめなどは當然として、俗に陶製のさじを蓮華と景いふなども優美である。挿花の術、箱庭作り、盆景の山水、皆我が國人獨得の伎倆であつて、獨得の發達をしてゐる。繪畫では生き生きとした花木の色、禽鳥の飛動してゐるさまなど、西洋の靜物に



源義家

八幡太郎義家  
嘉承元年一七  
六六歿年六十  
八。

源頼政

武人で歌を能  
くした。平氏を  
滅さうとして  
兵を擧げ敗れ  
て宇治で自殺  
した。時に治承  
四年一八四〇  
年七十七。

平忠度

壽永二年一八  
四三歿年四十  
一。

馴れた目から見たら、珍しく感ずるに違ひない。すべて花を活けるにも、それを描くにも、その生きたまゝに、自然のまゝにするのが美しい點である。枝からむしり取つて花ばかり挿込むのは西洋の花瓶であるが、自然の枝振りそのまゝに、天地の配合よろしく表はすのが、活花でも盆栽でも、日本人の長所である。日本人は眞に自然の友である。よく自然の心を解したものである。四季の風光は一日も我が國民の頭から離れた事はなかつた。四季の景色と人事とを結び附けて感ずることは、即ちあはれを知るのである。源義家や、源頼政や、平忠度が、いかにも日本武士として優に優しく感じられるのは、このあはれを知つたといふ事があるからである。太田道灌に關する「みの一つだになきぞ悲しき」の話は、史實ではなくして傳説であらうが、歌を好んだ武士で

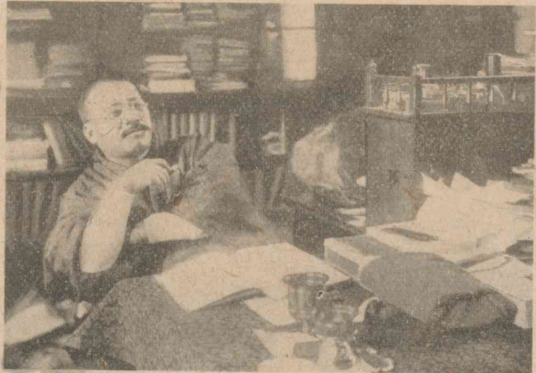
太田道灌

名は持資、上杉  
定正の臣。文明  
十八年一四  
六刺殺された。  
年五十五。

あるから、あゝいふ傳説が附いたのである。頼朝も秀吉も、暇のある時は風流の技を翫んだのである。風流といふこと、詩的といふことの意味は、自然に向つてのあこがれがその大半を形作つてゐるのである。日本武士道は、西洋の騎士道のやうに婦人を崇拜せぬ代りに、自然を愛し、ものあはれを解したのである。英雄豪傑ばかりではない、日本人程國民全體が詩人的なのは、恐らくは世界中にあるまい。歌心は誰にでもある。今日日本で歌を作る人はどのくらゐの數であらう。宮内省への毎年の詠進は何十萬といふ數である。歌を作らないでも俳句を作る。どんな片田舎にも俳句の宗匠はある。神社奉納の額面は到る所に小詩人の名を列ねてゐる。短くて作り易い詩形であるから、上手でこそなけれ何人も作つて、花見、遊山の時にも一興とするのである。こ



の花見といひ、雪見といひ、月見といひ、春は花、秋は紅葉、小詩人はまことに忙しいのである。悪事をはたらいて死刑に處せられる



一 矢 賀 芳

大悪人でも、死に臨んでは、一首を口ずさむといふやうなのは、恐らくは他國にはない事であらう。我が國民は全國民を擧げて抒情詩人である。敘景詩人であると言つてもよいのである。それ故、我が國民は隱居すれば盆栽いぢりをする。歌や插花に慰安を求め、昔は罪なくして配所の月を見たいと言ふ人もあつたが、日本人が世の中を厭ふと言へば、風流三昧に日を送るのである。西洋でいふ厭世

敘——叙

罪なくして云

源顯基、永承二年一七〇七歿。

鴨長明

鎌倉時代の歌人、文學者、建保元年一八七三歿、年六十三。

深草

京都市伏見區元政上人

江戸時代の日蓮宗の高僧、寛文八年二二二八、寂、年四十六。大田垣蓮月

京都の人、名は誠せし。明治八年二五三五、寂、年八十五。

は、ほんたうにこの世の中が厭になるのである。自殺するより外に方法がない。日本人の厭世は人事社會がうるさいのである。人事社會から遠ざかつて、花鳥風月に近附けば、それで厭な思はなくなるのである。西行法師が世を遁れたと言つても、一生行脚して花月を楽しんでゐた。鴨長明も頻りに世の中をあぢきなく思つたが、庵室にはひつて自然を楽しんで満足してゐた。その他深草の元政上人でも、近い頃の大田垣蓮月でも、世の中に立交るのは厭でも、自然といふ樂地は別にあつたのである。



清原貞雄

倫理學者、文學  
博士、廣島文理  
科大學教授、明  
治十八年二五  
四五大分縣に  
生れた。

二四 恵まれた國土

清原貞雄

我が國は昔から豊葦原瑞穂國と呼ばれてゐる通り、地味が肥沃で、五穀が豊かに稔り、その上、位置が人類の棲息するに最も適當な緯度に當つてゐる。随つて、春夏秋冬の氣候の變化が適度に行はれ、盛夏と雖も華氏の九十度を超えることは少く、嚴冬と雖もその三十度を下ることは多くない。溫暖な春と爽涼な秋とが比較的長く、春は櫻花をはじめ百花が爛漫として野山を飾り、禽鳥が到る所に聲を合はせて囀る。秋は紅葉の錦が燦爛として山溪に輝き、鳴蟲が千草の中で妙なる音樂を奏でる。その他、夏の夕べのそゞろあるき、冬の朝の雪の眺もまたなく愉快である。

我が本土は海上に點在する島である。随つて、茫々千里に亙る

温—温

大平原はない、いづこをはてとわからぬやうな大森林もない。程よい大きさの山や川や平野が到る所にあり、海岸線も概して出入が多く、海上には所々に小島が點在して風情を添へてゐる。げに我が本土の土地は、こゝに住む國民にとつて恐るべき神祕ではなくて、愛すべき自然である。我が國土の誇たる靈峰富士の如きも、雄大莊嚴、これに對する者に神々しき感をこそ與へるが、畏怖の念は少しも起させないのである。

我が本土は列島の上に國を成してゐる關係上、大陸の一部に居を占めてゐる國々の民がしばしば遭遇するやうに、他の強大國から壓迫される機會は古來極めて稀であつた。兇暴なる民族に蹂躪され、掠奪され、親を殺され、妻子を攫はれ、一地または一國を擧げて焦土にされるといふやうな悲惨な運命に遭遇したこ

しばしば(屢)



もと(固、素より

たとひ(假令)

とは、上下三千載を通じてたゞの一度もない。これもとより我が皇室の御稜威によつて國家が常に健全であり、國民が武勇を尙んで、たとひ我が國を窺ふものがあつても、一舉にこれを撃退することが出來たからでもあるが、一つには我が國が地理的位置に恵まれてゐたからだともいへよう。

若し、我が國がもつと遠い大洋の中に孤立してゐたならば、どうであつたらうか。よし他國の侵略は免れることが出來たとしても、文化の進歩は望むことが出來なかつたであらう。然るに我が國は、他國の文化と全くかけ離れるほど遠く孤立してはゐない。のみならず、海上の交通が夙に發達した結果、古來大陸との交渉も絶えず行はれ、爲に大陸に發達した文化は悉くこれを攝取し吸収して、その進歩に資することが出來た。かくて我が國は、遂

に東洋文化の綜合者、大成者たる光榮をさへも擔ふに至つたのである。

まことに我が敷島の大和國は、最も恵まれた國土である。我が國は神の深き思召によつて作られ、守られてゐる國であるといふ自信、即ちいはゆる「神國」であるといふ信念を我が國民が古くから抱いてゐるのは、決して理由のないことではない。たゞ今日に於て、人口過剩の結果、國土の狹隘を感じ、物資の不足を告ぐるに至つたのは、國家として大いに考へなければならぬことである。今後の我が國民は、積極的には農産物の増收並びに工業の發達を圖り、且つ海外貿易の發展を企て、消極的には正しき節約を行ひ、無益の費を省く事によつて物資の不足を補ひ、以てせつかく恵まれた自然の樂土を擁護し、ますくその樂土たる特質

せつかく(折角)



あめのした云  
云  
本居宣長の歌。

を發揮せしむるやうに努めねばならぬ。

あめのした國はおほけどかむろぎの

うみなしませる大八洲國

(提日出る國による)

新修國文

四年制  
女學校用 卷一終

附 録

手紙の心得

服 部 嘉 香

服部嘉香  
詩人、文章家、明  
治十九年(一五  
四六)東京市に  
生れた。

かういふ時に  
は全く「さん」附  
に呼びたくな  
ります。

凡そ「待つ」といふことのうちで、手紙を待つくらゐ楽しみなものはありません。どうかすると、朝から晩まで手紙を待ち暮らすやうな日があります。朝の便、晝の便、夕方の便——手紙、どこからも來ない……。「はい」と答へられる日の暮の心は、夕闇と共に遣瀨ない思に閉されてしまひます。

見事に晴れた朝、それと足音に聽分けられる郵便屋さんが、朗かに「郵便！」と玄關先に投込む封書、葉書、雜誌、新聞、小包、幾つか一緒にどざりと音がすれば、その日の幸福が約束されたやうな氣がします。とりわけ雪の旦、雨の夕べ、休の日のおとづれ、花の知らせ、旅の便り、病床への見舞狀などの嬉しさは、何に喩へやうもあ

(附録) 手紙の心得



りません。

手紙は知る人、知らぬ人への友情の延長であります。紙と筆とを以てする心から心への訪問であります。真心を紙に載せての面會であります。しかも、談話は直ぐ消えてしまひますけれども、手紙は永久に消えません。少くとも相手の心に我が心の跡を何時までも残します。昔から「尺牘は千里の面目」と申しますが、それは同時に「千載の面目」でもあります。もし見つともない書き方をすれば、それは千里の恥、千載の醜ともなりませう。殊に一旦差出した以上、宛名の人が見るばかりでなく、どういふ事でどんな人に見られるか、年を経てどんな所へ渡るか知れません。いよゝゝ迂闊には書けないのであります。

人によつては、手紙は話すやうに書けばいゝと言ひますが、單

江南ノ諺ニ云  
フ、尺牘書疏ハ  
千里ノ面目也  
(顔氏家訓)

徳富蘇峯氏の  
近世國民日本  
史は、昔の人の  
手紙を主な資  
料として書か  
れてゐます。

に談話の筆記といふ程度の事では、好い手紙は書けません。それに談話ならば、足りない所は身振や表情で助けることも出来ませうけれども、手紙にはその便宜がありませんから、一度で心の届くやう、それ相當の苦心を要します。

また、普通の文章さへ巧く書ければ、手紙は書き易いと言ふ人もあります。これも誤です。普通の文章は一般の人を讀者としますから、どんな書き方をしても、幾人かにはわかつてもらへませうし、名文は名文で、多數の人を感動させますが、手紙の方は、特定の個人に宛てるもので、しかも相手は、思想、感情、性格、趣味、経歴、境遇を異にした老若男女いろゝゝでありますから、その場ゝゝで各人各様の向きゝゝに工夫せねばならず、決して簡單には考へられないのであります。昔から能文家が必ずしも手紙上手でな



東宮御學問所  
御用掛であつ  
た杉浦重剛先  
生は、女子の修  
養科目は料理、  
裁縫、手紙、按摩  
の四科目でよ  
いと言はれた  
ことがありま  
す。

(附録) 手紙の心得

四

い實例を多く見ますのも、このためであります。  
要するに、手紙は平素から特別の習練を積まねばなりません。  
實用の上に、社交の上に、處世の上に、特に婦人の教養の一つとし  
て、これほど大切なものはないことを自覺して、早くからこの道  
に心掛けられたいものと思ひます。  
但し、特別の習練といつても、むづかしいことではありません。  
手紙は上手に書かう、巧く讀ませようと思つてゐると、却つて筆  
が進まないもので、最初のうちは、上手でなくともよい、とにかく  
日常の務として眞面目に書かう、へり下つた氣持で出来るだけ  
たび／＼書かう。——かう決心して、それを實行すれば、同時にま  
た、手紙に關するいろ／＼の規則や書式や禮法や言葉遣などに  
も注意してをれば、何時の間にか思ふまゝの手紙がすらく／＼と

法學博士下村  
宏氏は、媒酌し  
て戴いた方へ  
四十年近く毎  
月結婚記念日  
に御夫妻で手  
紙を出してを  
ります。

(附録) 手紙の心得

五

書けるやうになります。すらく／＼と書ければ、また自分から進ん  
で何かと工夫するやうにもなり、氣の利いた、當意即妙の文句な  
どもひとりでに浮かんで來て、筆者その人の人柄そのまゝな特  
色ある手紙が書けるやうになります。習ふより慣れろで、多く  
書く、念を入れて書くといふところに秘訣があるのです。試みに  
手紙一般の心得を箇條書にしてみますと、次のやうでもありま  
せうか。

- 一 相手に尊敬と親しみを捧げつゝ、自筆で書くこと。
- 二 事あれば即座に、思ひ立つたら直ぐに認めること。
- 三 返事は必ず折り返し認め、相手の心を外らさぬこと。
- 四 氣取らず、甘えず、厭味にならぬやう氣を利かすこと。
- 五 腹の立つた時は筆を執らず、冷靜に返るを待つこと。



石黒忠恵子爵は、毎朝來信の返事を書終るまでは來客に會はれませんが來信の方が先客だといふ理由からです。書出しの挨拶を

起筆 布啓 頭語 などともいひます。結びの挨拶を 留書 書留 結語

- 六、文章は達意を専らとし、多少とも趣味を添へること。
  - 七、用語は平明を第一とし、卑語や方言を使はぬこと。
  - 八、文字は明瞭を旨とし、拙くとも鄭重に認めること。
  - 九、書終へた時に必ず讀返し、誤字、脱字に注意すること。
  - 十、書式禮法を正しくし、用紙の華美、粗悪を避けること。
- 次に手紙の組立であります。前文と主文と末文の三段に工夫します。前文には「拜啓」とか「母上様」などと置く書出しの挨拶、續いて時候、安否の挨拶、もし必要ならば感謝、陳謝の挨拶などが含まれ、末文には、主文のしめくゝりの挨拶「御身御大切に」とか「皆様に宜しく」などの書添への挨拶、それに最後の結びの挨拶などに分かります。以上が本文で、その外に書漏らしたことを書入れるのは追て書となります。人と事とにより、長短いろ／＼に

などともいひます。

私は、わたくしとも「わたくし」とも讀むが、手紙の中では鄭重に「わたくし」と讀みます。「わたくし」と讀まれたくないと思へば假名で「わたくし」と書くのが安全でせう。

なりませうし、前文や末文を省略することもありますから、實例について申し上げませう。

贈物に添へて、祖母へ

お懐かしい祖母上様。

その後はいよ／＼お健かにお暮らしのこととお喜び申し上げます。私は相變らず元氣で通學いたしてをりますから、何卒御安心下さいませ。

今日小包で綿入をお送りいたしました。私が縫つたのでございます。縫つては解き、解いては縫ひしまして、その都度お母様のお小言も一緒に縫込みました。拙いわざで恥づかしうございますけれども、お寒さ凌ぎのお役に立ちますれば、何よりと存じます。



なほく時節柄御いとひ遊ばしますやう祈り上げます。  
菊江がオバアチャマにヨロチクと申しました。かしこ。  
前文、主文、末文がはつきりしてをります。かういふ手紙には、悪  
ふざけでない軽い言葉が趣を添へませう。

友へ、病氣の見舞

御無沙汰致しました。

昨日大川さんから伺つてびっくりしました。ずっと御病  
氣なのですつてね。ちつとも知りませんでした。お許し下  
さいましね。

遠方でお見舞に上がることが出来ません。たゞ心を痛め  
てゐますばかり。本を二冊小包でお送りしました。  
くれぐれも御大切に。一日も早く御全快のほどお祈り致

〔いたします  
致します〕

どちらでも差  
支ありません  
が、一文中では  
同一のものを  
書きます。

します。まづは御見舞まで。さやうなら。  
見舞の手紙は、それを知つて直ぐに出さねばなりません。前文  
は長々しく書かず、主文で眞心から慰めて上げます。

その返事

春子様、お手紙有難う御座いました。ほんたうに淋しい淋  
しいわたくしにとつて、どんなに嬉しかつたことでせう。  
お便りのみか、面白い御本を二冊までお恵み下さいまし  
て、何とも御禮の申し上げやうも御座いません。でも、お蔭  
様ですつかりよくなりました。もう熱もありませんし、食  
べものもふだんと違はなくなりました。たゞ身體が少し  
だるいだけです。二三日しましたら歸京します。學校へも  
参ります。お目にかゝれるのを楽しみにしてをります。

〔御座います  
ございます〕

どちらも書き  
ますが、同一文  
章の中ではど  
ちらか一つで  
通すのが正し  
いのです。



ほんたうに有難う御座いました。くれぐれも御禮申し上げます。時節柄どうぞお身體御大切になさいます。かしこ。心から心への手紙とは、かういふのを指すのです。心からの喜を書き、安心を與へ、末文に相手の自愛を祈つて、結びの挨拶に「かしこ」を置く鄭重な書き方に、感謝の誠は溢れませう。

旅の便り

父に連れられて奈良に参りました。歴史で學んだ舊跡をあれこれと尋ねて、心は遠い昔にあこがれてをります。町も人もさすがに物静かで、名物の鹿の愛らしさ、芝生や燈籠の美しさなど、やはり舊都だけのことはあると思ひました。明日は笠置へ登りますはず。いづれ歸りましてから委しく申し上げます。それまでこの大佛様と話してゐて

下さい。どうぞ御大切に。さやうなら。

かういふ旅信は、前文や末文に構はず、ありのままを面白く書き送つた方がよいと思ひます。

目上や鄭重な用向には封書が宜しく、葉書は略式になります。が、いづれ明日にでもと思つたのがつい延びくくなるよりも、葉書でも失禮にならぬやう丁寧に認めて、用あれば即座に實行したいものです。代筆は失禮となつてゐますが、老人や、多忙の人や、重病人などの許されずし、代筆でも早い方が禮儀にかなふことを忘れてはなりません。

「何れ近日參上  
萬々御禮申し  
上げます」と書  
く人に限つて  
近日參上しな  
いやうです。氣  
を附けること  
です。



昭和十四年八月十九日 印刷  
昭和十四年八月二十二日 發行  
昭和十五年一月二十四日 訂正再版印刷  
昭和十五年一月二十七日 訂正再版發行



編者 富山房編輯部

發行者 合資會社 富山房

東京市神田區神保町一丁目三番地

代表者 坂本守正

東京市京橋區木挽町三丁目十一番地

印刷所

東京市神田區神保町一丁目三番地

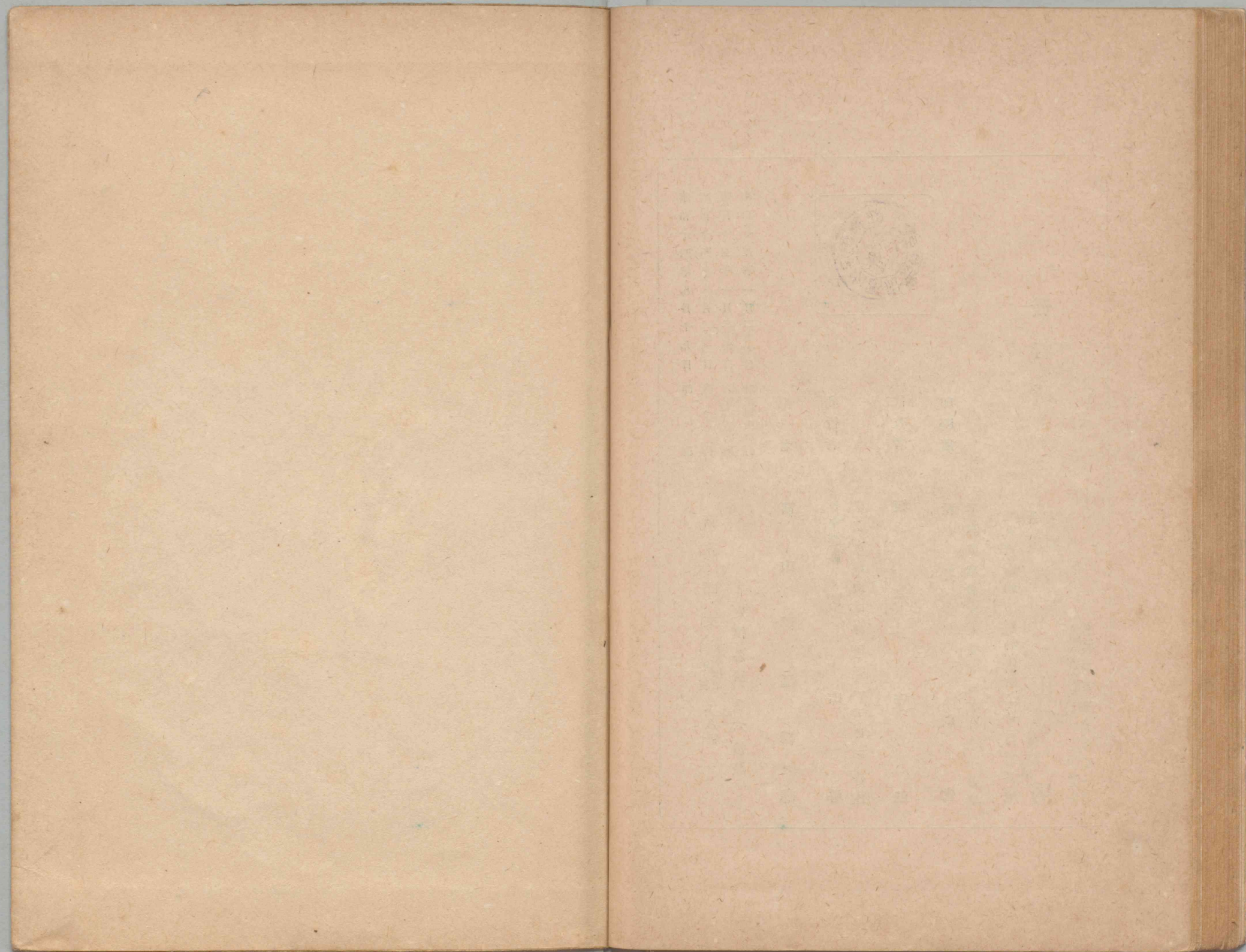
發行所

合資會社 富山房

電話神田三七一—二七八番  
振替口座東京五〇一

新修國文 四年制 全八冊  
定價各冊 金六拾錢









実一

西向井千鶴子



*C. Mishimukai*